

飛行機に乗ったドン・キホーテ

ラテン・アメリカからのメッセージ

文化の原点スペインを訪ねて

はじめに



日本からみると地球の反対側にある中南米は、その歴史的・文化的いきさつからラテン・アメリカとも呼ばれる。メキシコ以南の大陸とカリブ海の島々からなる地域で、33の国家とアメリカ合衆国、イギリス、フランス、オランダの属領に分かれている。面積は2055万平方キロ。南米大陸の西側にはアンデス山脈が走り、その東側には流域面積が日本の10倍にもなるアマゾン川が流れていて自然環境は多様性に富む。

歴史的には、先住民の文化に、15世紀末からスペイン、ポルトガルを中心とした旧大陸のヨーロッパ文化が浸透した。その結果、ブラジルがポルトガル語の他は、残りの大部分がスペイン語文化圏の国となった。

インターネットが地球を席卷した現代は、政治的にも経済的にも力をもった英語文化圏の影響力が大きい。ラテン・アメリカには多様性が秘める創造力と未来性がある。ブラジル、ペルー、アルゼンチンなどは、移民を通して日本との関係も緊密で深い。また近年では、“メイド・イン・ジャパン”製品が街のいたるところに溢れている。しかしながら、これらの国々の文化や市民の生活となると、欧米に比べて日本に紹介されている割合が少ないのが実状である。

筆者は、NHK学園高校の教諭を務めた後、1976年から10年間、新聞の特派員としてパナマに常駐、ラテン・アメリカのほぼすべての国に足を踏み入れる機会に恵まれた。帰国後も、日本からこれらの地域を訪ね、また定年後は、その文化の原点であるスペインに留学し社会事情等についても学んできた。

世界はますます狭く一つになり、同じ地球市民としての共存・共栄が求められている。それにはまず、各国の異なる文化や考え方、生き方を理解していくことが大切となる。以下は、現地の人々と肌を触れ合って実感した“生の国際体験”である。本レポートが皆さんの国際理解と平和貢献への一助となればこんな嬉しいことはない。

「東京のドン・キホーテ」はロシナンテ、いや時代は移り変わって飛行機に乗って・・・。

（「 」は1976年から85年までの常駐特派員だった時の記事にその後、日本から訪問・取材した2001年までの内容をもとに加筆添削したもの、「 」は2002年から03年までの留学中の記録からである。（写真撮影：筆者 イラスト：柳館洋子）

<筆者プロフィール>

清水 武（しみず たけし）



1941年長野県に生まれる。早稲田大学卒業後、NHK学園高校の教諭として勤務。69年聖教新聞社に入社、76年より10年間、同紙特派員としてパナマに常駐、北中南米およびヨーロッパの32カ国を訪問する。2001年に定年退職後、福生市のセントラル・テキサス・カレッジで学び、02年にはスペインのマラガ大学に1年間留学。現在、NPOで在日外国人の支援活動にもあたっている。日本ペンクラブ会員。

著書：「ラテン・アメリカに暮らして」「『定年留学』してみませんか？ 60歳からのアクティブ・ライフのすゝめ 」

目 次

	ページ
まえがき.....	1
第1部 ラテン・アメリカからのメッセージ	
時間に対する生活感覚.....	7
「アスタ・マニャーナ」との出会い	
五つの「あ」の原則	
時間が主人か？人間が主人か？	
ところ変われば・・・.....	10
ジェスチャーの豊かさと控えめな日本	
理髪店では鏡を背に座られる	
椅子にも日本のメーカー名が・・・	
つり銭の数え方も違う	
闘牛に見る感情の落差	
なにをもって「残酷」とするのか？	
ミニ食事文化論	13
生涯消えない「おふくろの味」	
世界を制覇したマクドナルド戦略	
フォークと箸の違いから	
日本料理の“国際市民権”は？	
パナマ人を我が家に招待してみる	
人種 この複雑なるもの.....	16
「日本へ行ったら日本人だらけだった！」	
機中で「黄色人種」として差別される	
スポーツクラブで聞いたショックな発言	
“名誉白人”として遇される日本人	
「中国人」として同一視される心理	
今も残る“脱亜入欧”のかげり	
スペイン語とスペイン文化.....	20
発音しにくい？「シミズ」	
影が薄い「謙譲」の表現	

	「いただきます」の言葉がない！ 「コケッココー」は「キッキリキー」 短歌、俳句を理解してもらうことの難しさ	
ニッポンと日本人		23
	日本製品の広告が他国を圧倒 経済進出ほどに進まない理解 アマゾン上空での会話から 日系移住者が築いた信用	
小話ではこんなふうに語られている		26
	無人島での男2人と女1人 自動車の本場アメリカで日本車が売れる理由 タイタニック沈没時の各国男性の行動は？	
国際人・国際化とは？		28
	カリブ海のホテルで出会った日本人 メキシコのレストランでの日本人観光客 海外では「外国人」の自覚こそ 国際会議では「3S代表」だって！？ 国際人への要件は？ あなたも得られる！「国際人へのパスポート」	
社会の貧富の格差		33
	アングロ・アメリカとの対比 「開拓」と「征服」の歴史のなかで	
空港が映し出すギャップと人間模様		34
	チリの地図—日本は地球の果てにある？ ラパスの空港で高山病にかかる メキシコの税関職員とのやりとりから	
パナマ運河の歴史と未来		36
	死闘を伴った建設の経過 船は海面から26mまで上がる	
カリブ海の島々から		38
	昔の伝統を今に生きるクナ族の世界 特産ともなっている美しい「モラ」	

ティオティワカンのピラミッド	39
	頂上で生贄（いけにえ）の儀式が 驚くべき古代の宗教観と現代と・・・
マヤ文明	41
	ユカタン半島チチェンイツアの遺跡 グアテマラ - 今もほぼ半数がマヤ系インディオ
インカ文明	42
	幻の空中都市マチュピチュ スペインの征服者ピサロが用いた奇策
ガラパゴス諸島（エクアドル）	44
	進化論の島 恐竜時代が目の前に
赤道をまたいでみると	45
	地球の南北両半球を同時に踏む！
親日の土壤①	46
	軍艦などで世話になった歴史的経過 チリから日清戦争の際エスメラルダ号を アルゼンチンからは「日清」「春日」を
親日の土壤②	47
	新見豊前守や支倉常長一行も大陸を踏む 世界はボーダーレスの時代へ

第2部 文化の原点スペインを訪ねて

なぜスペインへ？	50
	高校時代からの夢を実現 Having より Being
マラガ大学での学生生活	51
	多彩な国籍・民族・年齢が集う 担当教師をファーストネームで呼ぶ ビクティマ(犠牲者)を名乗り出る 私の研究発表 侃々諤々（かんかんがくがく）の意見が続出

	クラス仲間を我が家に招待 美人女子大生とのキスと抱擁 “我がドン・キホーテ”を語る	
各地を訪ねて		59
マドリード	ブラド美術館：教科書でなじみの作品がいっぱい	
セゴビア	ローマ水道橋：壮大な歴史遺産	
アルカサル	修学旅行の中学生たちと友情交歓	
トレド	観光地ではとりわけ用心を！ 遠方から眺めてこそトレドの町	
ラ・マンチャ地方	我もまた「ドン・キホーテ」の如くに	
バルセロナ	厳重警戒の日本領事館を訪ねる	
鬼オガウディ、ピカソ、ミロと・・・	自らを啓発する海外旅行	
セビリア	「カルメン」の舞台を訪ねてみたが・・・ 人生の哀歓を表現したフラメンコ 「ハポン」の姓を持つスペイン人	
グラナダ	イスラム芸術の粋アルハンブラ宮殿	
ジブラルタル	ワールドカップの感想あれこれ 海上交通と軍事面での要衝 洞窟の中でコンサートを	
郷に入ったら郷に従え		75
小さな小さな民間外交	写真店での会話から スペインの消防署に大阪消防署のエンブレムを 日本の押し花に“ケ・ボニータ！”	76
語学習得のために	私の語学取り組み体験 34歳で初めてスペイン語に取り組む 語学は「やる気」と「根気」以外にない 50歳を過ぎて再び英語に挑戦 定年後からスペイン語の完成を目指す 語学の翼で世界に夢を	78

第1部 ラテン・アメリカからのメッセージ

時間に対する生活感覚

「アスタ・マニャーナ」 との出会い

地球の反対側（「裏側」というべきではない。例えばブラジルから見れば日本が裏側になる）にある中南米（「ラテン・アメリカ <Latin America>」とも呼ばれる）は、その地理的な違いのみならず、人間の生き方、考え方に至るまで、日本とは著しい対照を見せている。

この地域の人々の生活また気質を最も端的に表徴している言葉に「アスタ・マニャーナ <Hasta Mañana>」がある。このスペイン語を文字通り訳せば「明日まで」または「明日また」となる。一般に、別れ際に使われる挨拶言葉だが、中南米滞在で、現地の時間感覚に業を煮やした日本人の中で、これを「あしたがあるさ」と揶揄（やゆ）的に解説したがる人もいる。

パナマに赴任してまもなくの頃、支局の電話が故障してしまった。熱帯サバナ気候のパナマに四季はない。雨のまったく降らない**乾季**と、一日おきほどに激しいスコールの降る**雨季**の2シーズンのみ。

この雨季の、まさに滝のような雨に見舞われた翌日は、ときおり電話が通じなくなることがある。古い回線の部分に水がしみ込んで支障をきたすのである。支局の電話もそこに原因があるらしかった。私は近くの公衆電話から電話局に修理依頼を申し込んだ。

「ハイ、わかりました。係に報告しておきます」
電話口に出た交換嬢の愛想はすこぶるよかった。ところが、待てど暮らせど「係」は来ない。そこで、もう一度ダイヤルを回した。
「もう報告してあるから、間もなくそちらに着くでしょう」



バナナの木の花と房

果たせるかな、とうとうこの日「係」は見えなかった。緊急の電話連絡がたまっている。少タイライラしてアパートに帰ると、パナマ滞在では先輩の隣人曰く。

「そりゃハポン（日本）と同じことを期待するのが無理ですヨ。ここは一年中暑い国。あなたみたいにセカセカ動くと体に悪い。郷に入ったら郷に従え。ハラを決めることですナ」

翌朝。電話の催促のみでは不十分とみた私は、南国の太陽の照りつけるなか、電話局まで直接おもむき、日本式談判に入った。

「昨日電話した件、修理に来ていないけど、どうしたのでしょうか」

「あいにく係がいなかったんだ・・・」

「こちら急いでいます。ともかく、担当の係の方にできるだけ早く・・・」

「わかりました。できるだけ努力はします。でも、もしきょう行けなければ、また明日ネ」

そう、この明日というやつだ。明日もある。その次という日もある。ここではそんなに焦ってはいけないのである。幸いにも、電話はその日の午後に修復した。電話局の上層部にアミーゴ（友人）を持つ私のアミーゴが、特別に手配してくれたからだった。

五つの「あ」の原則

そこで私は、ラテン・アメリカで現地にとけ込み生活するために、次の五つの「あ」の原則を編み出した。

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」そして決して「あきらめず」。我ながら至言と思う。少なくともこの「五原則」を心に納めている限り、イライラして余分な神経をすり減らすことも少なくなるだろう。

ここでは、風にまかせて飛んでいくソンプレロ（中南米風の帽子）のような、ゆったりとした生活スタイルが大事なのだ。

「アスタ・マニャーナ」とは、することを先に延ばしているのもあって、決して「やりません」とは言っていない。その意味では、相手も自分も傷つけない優雅な言葉ともいえる。こんなアスタ・マニャーナのおおらかな社会に、セカセカした日本式リズムで飛び込んでいけば、時間の歯車がかみ合わず、ギアが欠けたり、空回りするのが当然のなりゆきかもしれない。



時間が主人か？人間が主人か？

中南米を旅行していて、飛行機が1時間や2時間遅れるのはまれではない。でも、乗客はとりたてて目くじらをたてたりはしない。「どうせいつかは動くんだから」と悟りきっている風情がある。

現地から日本を訪れた中南米の人が一様に報告することは日本の治安の良さ、秩序だった行事の運営、交通機関の時間の正確さである。何本も錯綜する都内の電車が数分おきに発着すること、あのシンカンセン（新幹線）が数秒も変わらずにピタリと駅の乗降場所に停車することなどは、彼らにとっては神業に近いのかもしれない。



房についたヤシの実

半面。日本人が、この交通機関に命令されたかのように、バス停から駅へ、ホームから乗車口へと黙々と歩いていく様は、少々異様にさえ映るようだ。同じ黒みがかかった衣装の人間の群が、怒濤（どとう）のようにはき出されてくる通勤時の駅の情景をじっと見ていたボリビア人が「アッ 戦争が始まる！」と駆けだしたという逸話もある。

ともあれ、日本人の時間忠実、勤勉性は、海外に進出した企業で働く商社やメーカーの駐在員の働きぶりにも、はっきりと出ている。

こちらでは、勤務終了の時間が来れば、仮に仕事が途中であってもサッと引きあげる。残った仕事は「アスタ・マニャーナ」でよいのである。それよりも、自分の生活を楽しむ方が大切なのである。

ところが、日本からの駐在社員はそうはいかない。本社との交信に「時差」の問題もあるが（東京本社の上司が昼間の出社中に電話連絡を取ろうとすれば、現地では夜中にかけてせざるを得ない）、夜遅くまで明かりのついているビルの事務所といえば、たいがい日系企業というのが相場なのである。

あえて言えば、「人間が主人で時間は従者」のラテン・アメリカに対し、「時間が主人で人間が従者」の日本ととれるかも。ともあれ、「時は金なり」との格言はここではあまり通用しない。



枕のように長いスイカとパイナップル

衛星中継で、東京の通勤風景が現地のテレビに映る。満員電車で必死に乗り込もうとする乗客や“押し屋”の通勤風景を見るにつけ、アスタ・マニャーナの生き方と、一体どちらが人間らしい生活なのか、考えさせられる。

一步海外に出たとき、日本と異なる多様な文化や生き方があることを知ろう。

時間に正確で、効率を求める日本的な生き方と、ゆったりとしたラテン・アメリカ的な生き方と、それぞれが人間にとって、また未来にとってどのような意味を持ってくるか比べてみよう。

ところ変われば・・・

ジェスチャーの豊かさと控えめな日本

あらゆる人種が混交している中南米の地域で、人々の体型、肌色、顔かたちが違うのは当然として、その表情、またジェスチャーの豊かさにしばしば日本人は圧倒される。

出張帰りのパナマ空港でのこと。機が着陸。帰国（再入国）の手続きと税関審査をすませ、空港のロビーに出ると、大変な数の出迎えの人々に遭遇した。観光旅行のグループの家族や親戚、友人のようだった。

トランクや荷物を足下に置くと、機から降りた彼らは後からの通行人もかまわず、出迎えの人々と次々と抱擁やキスを交わし始めた。もっとも、キス（スペイン語では「ベシート」という）とはいっても、この場合、恋人同士や夫婦は別として、唇を重ねるキスではなく、頬へのキスカ、頬と頬を合わせていかにもキスのように「チュッ」と唇を鳴らすものである。ロビーはたちまち熱い交歓の場と化した。

そもそも、体温と体温をじかにぶつけ合っただけの再会あるいは出会いは、慣れてみると、そこに冷たい空間を隔てたままの日本式お辞儀よりはるかに温かみがあり、親愛の情がこもっていると言えるかもしれない。

もっとも、近年の日本の若い男女の間にも、同様な傾向が見られるようになってきているが・・・。

そのほか、国によって異なるが、ラテン・アメリカのどこに行っても豊かなジェスチャーであふれている。自分が納得できなければ、会議中でも大げさに首を振ってみせるし、少し手の込んだものとなると、額を手で拭いて汗水をとり、下へ思い切り振り落とすジェスチャーをする。これは「もう大変だ。精一杯努力している」といったたぐいの表現である。ともかく、こちらでは、手や顔または体全体を使って表現するから、印象も強烈だし、同じ話でもなんとなく訴える力が強くなる。

これに反して日本人のジェスチャーは、一般に控えめで、しぐさ、身振りはごく小さい。これは、「でしゃばり」を悪とし「控えめ」「遠慮」を美德とする日本の伝統の中で培われてきたものなのだろう。

ところ変われば品も、生活も、慣習も変わってくる。しぐさ、あるいはジェスチャーについてだけでも、比較文化論の材料になりそうである。

理髪店では鏡を背に座らされる

パナマ市内の理髪店でのこと。

「いらっしやい、セニョール（旦那さま）。口ひげの立派な理髪師が肘掛け椅子に案内してくれた。ところが鏡に向かって座ろうとしてハタと戸惑ってしまった。椅子の向きが日本と反対なのだ。鏡を背にする格好になっている。

「・・・？ これじゃ、どんな風に調髪されているかもわからないし、途中で髪型の注文もつけられないじゃない？」

いかついひげの理髪師に私は問いを発した。はさみをカチカチ鳴らしながら、調子を見ていた理髪師はおもむろに答えた。

「そりゃあ、セニョール、お客さんの我々に対する信頼の問題ですヨ。先にお客さんの注文を聞き、最後にそのように仕上げればいいじゃないですか？」

私は運を天に任せるつもりで椅子に座ると目をつむった。と、「ちょっと失礼」との理髪師の言葉とともに、椅子は後ろに倒された。私は椅子の上に仰向きに寝た形となり、頭は洗面台に突き出された。散髪前なのである。

「こうした方がハサミの入りがよいんでネ」

いちいち日本との方式の違いをただす私の石頭を、理髪師は無造作にゴシゴシ洗い始めた。散髪後には洗髪はないという。しかも「どこかカユイところはありませんか」といった類の細やかな配慮などは全くない。それでも、この仰向けに寝た形での洗髪だけは日本の方式よりもよいようだ。体が人間にとって最も楽な姿勢となっている。第一、シャンプーの水が目にしみこんだりする心配がない。

椅子にも日本のメーカー名が・・・

洗髪が終わり、体も元の姿勢に戻されると、隣の椅子の客と日バ文化論に花が咲いた。

「第二次大戦前には、百人近くの日本人の理髪師がパナマにいましたヨ。でも、戦争で皆帰ってしまった。ところが今はまた“メイド・イン・ジャパン”の大攻勢です」

そういう客の座っている椅子も自分の椅子も、よく見ると日本のメーカー名が入っている。

「ところで旦那、日本では着物を着ていたか、また柔道・空手をやっていたか？」と我が理髪師。残念ながら柔道も空手も当方には心得がない。そこで「日本ではジュータンに椅子の生活で、着物より洋服を着ることが多く、お茶よりもコーヒーを飲んでいたヨ」と、私もおもむろに返事をした。

日本製の商品はあふれるばかりに入っていて、そのメーカー名は知られていても、日本人そのもの、また日本の文化、伝統となるとまだほとんど知られていないのが実情なのである。

この間の散髪は約20分とすこぶる早い。日本式の丁寧なひげそりもクリーム塗りもない。それにしても、ちゃんとあて布もしたというのに、首の周りや肩には細かな髪の毛がいっぱい、そのまま家に帰ってシャワーを浴びねばならなかった。昔、この地にあって日本人理髪師が好評だったというのもよくわかるような気がした。

釣り銭の数え方も違う

ところで、このときの料金は7ドル()。10ドル紙幣を出したところ、釣り銭の勘定方法がこれまた違っていた。

「8ドル、9ドル、10ドル・・・」。レジを開けた理髪師は、1ドル紙幣を1枚ずつ私に渡しながらかう数えていったのである。つまり、 $<10 - 7 = 3>$ との日本式釣り銭計算に対して、ここでは売った商品またはサービスの値段に、釣り銭を客から受け取った金額になる

まで加えていくのである。

この釣り銭から、私はさらにチップを理髪師に手渡した。理髪師の自信とこちらの仕上がりへの期待は必ずしも一致しなかったけれど……。

ドル:パナマの通貨はバルボアであるが、実際には紙幣は同価の米ドル紙幣で、コインのみバルボアと米ドルの両方を使っている。パナマとアメリカ合衆国との間の運河建設の歴史的経過とパナマの経済政策からきている。

闘牛に見る感情の落差

ここはメキシコ市郊外の闘牛場。直径 70 ㍎ほどの円形のグラウンドの周囲に 8 段ほどの観客席がすり鉢状に上に伸びている。日曜日の午後 4 時。観客席は地元あるいは地方からのメキシコ人、そして外国人観光客でほぼ満員となっていた。

ファンファーレが高らかに鳴り響くと、きらびやかに着飾った闘牛士たちの登場である。彼らが粛々と正面貴賓席に向かって敬礼を捧げる光景は、どこか中世の儀式を思わせる。

やがて闘牛場の塀の一つの扉が開くと、そこから猛り狂ったように一頭の黒牛が飛び出してきた。背中的一点には赤いテープのような物がつけられている。それまで真っ暗な中におかれていた牛は、突然明るい中に押し出され、しかも何千人という観客席の人間の視線を浴びて、すでにそれだけでも興奮している。



まず、長い槍を手に、武装した馬にまたがった騎馬闘牛士がこの牛と対決した。闘牛士は馬上から赤いテープの位置をねらってズブッと槍を突き立てた。どす黒い血が太い筋となって砂の上にしたたり落ちる。牛はますます暴れ出した。

次は、2本の剣をかざした闘牛士が、赤マントを右に左にひるがえし、暴れる牛から体かわしながら同じ位置に剣を刺し込む。華麗な闘牛士の衣装もすでに返り血を浴びている。次第に興奮してきた観客席からは盛んに声援が飛び始めた。

「オーレ オーレ！」

「いいぞ いいぞ！」といったような意味だろうか。驚くことに、虫も殺さぬ風情（ふぜい）のセニョリータ（未婚女性）や貴婦人風のセニョーラ（既婚女性）も立ち上がりっぱかりにして同じように声援を送っているのである。続いて代わった闘牛士に、最後の一撃でとどめを刺され、奮闘あえなく黒牛はどっと砂地に倒れた。と、闘牛士は再び観衆に向かって挨拶、時には投げキッスを送った。

なにをもって「残酷」とするのか？

スポーツとはいえ、あの残酷さに熱狂するメキシコ人（すべてのメキシコ人がそうというわけでもないが）の感情はどこから来るものであろうか。

これについて、まず何を残酷とするかは、その国また文化や伝統によって異なることを

知らねばならないだろう。

かつて“鯨を食べる残酷な日本人”と、国際社会からの批判があったが、鯨のみならず、もっと言えば魚の活き作り、生魚（刺身）を食べる日本人の風習などは、彼らにとっては大変に残酷または原始的と映っているようである。

それぞれ、民族の血、慣習や文化の違いが反映したものとも言えるだろう。

本当に日本人のジェスチャーは他の国の人々に比べ貧弱なのだろうか。もしそうだとしたら、それはなぜなのだろうか。

闘牛に見る感情の落差、つり銭の計算の仕方の違いなどを理解しよう。

三二食事文化論

生涯消えないおふくろの味

日本人が一步祖国を離れたとき、最初にぶつかる壁が食べ物である。海外に渡るとなれば、少なくとも言語を初めとする文化の違い、また気候等の自然環境についても、それなりの心得を持って臨む。それは本人の努力によってある程度までは現地に適応していく。だが最も適応しがたく、それでいて毎日、三度三度やってくるもの それは食事の違いである。

人間が幼少から血肉にしてきた“おふくろの味”は、仮に30歳、40歳になっても、また居住環境が全く異なるようになっても消え去ることはない。パナマに10年近く駐在、世界各国を回ってみてそのことを痛感している。

パナマに赴任当初から、現地料理にもそれほど抵抗感はなかった。しかも幸いなことに、支局の近くにマクドナルドの専門店があった。そこで家族を迎えるまでの単身でいた約1年間、昼食といえばほとんどこのマクドナルドで通したのだった。そして夜は、炊くと粘りがなくポロポロで箸にかかってこないパナマ米をもとに自炊したり、近くのレストランを順繰りに回って歩いた。ときおり、日本食品が手に入ることがあったが、どれも値段は日本の2倍から3倍だった。

世界を制覇したマクドナルド戦略

そもそも、このマクドナルドはケンタッキー・フライドチキンと同じように、アメリカ発のファーストフードである。これが今、清涼飲料のコカ・コーラと同じく、世界を制覇したとも言われる。自分が訪れたどの国の都市でも、あの特徴のあるマンガ的な店の看板を目にした。

その世界制覇の秘密は“どこへ行っても、どこの国でも同じ味で食べられる”ことだという。軍事基地の関係またビジネスによる長期海外滞在、あるいは短期の観光を含めて、アメリカ人の姿は世界の隅々で見られる。その彼らが生きるためのベースともいべき食事にマクドナルドが浸透しているのである。時間も比較的にかからず、値段もそれほど高くはない。そして“どこに行っても同じ味を食べられる”という安心感が、彼らをしてマク

ドナルドに足を向かわせているようだ。

その上、今はアメリカ人のみならず、**インタナショナル化した社会**で働く各国の人にとっても、一歩国を出たときの食事に対する安心感を与えている。更に現在は、社会主義体制の国を含めて、その**スピーディな接客技術**とともに、進出先の市民の舌を、あの特徴ある味に慣らさせ、マーケットを拡大している。

いわば“食べる”という人間の最大の欲望また弱みを狙った、そして国外でその解決策を与えた商法が、マクドナルドが世界を制覇した秘密の一つだということのである。

フォークと箸の違いから

各国の料理そのものに違いのあるのはそれとして、面白いのはその食べ方、食事作法、食事時間帯などにかかわる違いである。

スープをズルズルと音を立てて飲んだり、食べ物を口の中でピチャピチャと音を立てて噛まないこと これは海外では最低限の守るべきマナー。もっとも、あのラーメンを音無しで食べたなら、味も気分もなくなってしまうという人もいるかもしれないが・・・。



ところで、テーブルで自らナイフとフォークを扱って肉を切り刻む食べ方を、箸を操って物をつまむ日本式食べ方に比べて残酷だ、と比較文化面からの見方をする人もいる。

ナイフやフォークは、食べ物をつかまえると、バラバラに刻み突き刺す。それにひきかえ、箸は食べ物をつかまえる代わりにはさみこむ。切断する代わりに小さく分けて取り上げる。そこには母性的な優しさがある と。

でも、これはもとをただせば、**肉食文化と菜食文化**、または**魚食文化**の違いからくると言う方が適切だろう。

ついでにこの肉食文化を**宗教的視点**から見ると、それぞれの対比が浮き出てくる。ヨーロッパやラテン・アメリカでは、牛や豚は神が人間の食用に作らせた、とするのに対し、アジアの**ヒンズー教徒は聖なる動物**として牛は食べないし、**イスラム教徒にとっては、豚は不浄な動物**として食肉は**タブー**となっている。

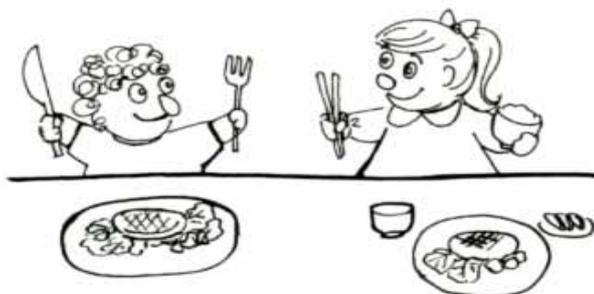
一方、食事時間についても千差万別。パナマでは昼食はふつう正午から午後2時まで。暑い国がゆえにかつては**シエスタ（昼寝）**の習慣もあったが、多忙な時代の波に巻き込まれ、今ではシエスタも少なくなり、昼食時間は1時間か1時間半とする企業も多くなってきている。

この間に、自家用車を持っているサラリーマンの大部分が自宅に帰って昼食をするので、朝と夕方の通勤時のラッシュの他、市内は昼食時にもう一度、車のラッシュを引き起こしている。

メキシコの昼食は文化の本国スペインと同じく、大体午後2時から4時頃まで。アルゼン

チンの夕食は一般に午後 8 時過ぎである。それまではレストランも開かない。

このように、食事内容のみならず、食器、作法、時間帯まで国や地方によって異なってくる。これも“ところ変われば”の一断面である。



日本料理の“国際市民権”は？

数ある世界の料理の中で、日本料理は国際的にどう位置づけられているだろうか？一言でいえば、残念ながらフランス料理、イタリア料理、あるいは中華料理のように“国際市民権”を得ているとはまだ言えない。

中華料理はアマゾンやアンデスのどんな奥地に行っても目に付く。フランス料理、イタリア料理は、これという都会には必ず何軒かあり、そこでは各国の人々がフォークを握っている。

これに比べて、日本料理の顧客は、その大部分を同じ日本人が占め、1人でも自ら店に入ってきて箸を握る外国人はまだ数えるほどである。これは、日本からの移住者また企業駐在員の増加がそのまま日本料理店の繁盛ぶりとなって反映している、という事実を見てもわかる。

もっとも、アメリカのニューヨークやロサンゼルスでは、アメリカ人が寿司や刺身を自分から注文しているシーンもあるが、世界全体における日本料理の浸透度という点ではまだまだとの感がする。

パナマ人を我が家に招待してみる

ある日、ふだん世話になっているパナマ人 5 人を家へ食事に招待した。こんなときは、必ず夫婦同伴だから都合 10 人である。「日本的なものを食べてみたい」という彼らの希望もあって、“最大限の日本的サービスを”と、妻もパナマ市内のあちこちを駆け回り、なけなしの食材を集めてきた。

スキヤキ、テンプラ、みそ汁、ご飯、お新香、それに簡単な寿司である。やはり、スキヤキ、テンプラはまたたく間に量が減っていった。何人かは「これは××で食べたことがある」とも言っていた。さすがにスキヤキは名前からしても国際化している。ただし、スキヤキに生卵を使ったのは 10 人中 2 人のみだった。刺身を初め、生の物はやはり苦手なのだ。

キュウリが入った寿司（カップ巻き）をフォークに刺した一人がいわく。「ここに巻いてある黒い紙のようなものナニ？」。海苔を説明するためには、まずその製造過程から説明しなくてはならない。

ご飯、つまり米は世界的に食べられていても、ここでは油で炒め、塩で味を付けたのでなければ彼らの舌には合わない。

いわゆる米をただ炊いただけの日本風の白いご飯は、ほとんどそのまま残ってしまった。みそ汁、お新香は初めから彼らの反応を見ようと思って用意した。ところが、好奇心からか、それでも半分以上が手をつけた。それにしても、日本料理が国際的に普及されるにはまだまだ相当の時間を必要とするな、と思ったものだった。

筆者が高校生だったころ、英語の文法の教科書で、「人間は生きるために食べる」のものであって「食べるために生きる」のではない、と習ったが、この哲理、ラテン・アメリカでは必ずしも当たっていない。ここでは、その逆もまた“正解”なのである。そして、「まだ注文の品が出てこない」と、日本人のように時計をにらみながらイライラすることはほとんどない。

身近な自分の毎日の食事から、ついミニ食事文化論までなってしまった。「食べる」という人間の行為、また欲望こそ、歴史的に人間の文化を発展させてきた源泉でもあるからである。ちなみに、近世ヨーロッパの「地理上の発見」が、黄金にかけた夢とともに、アジアの香辛料がそのきっかけになっていたことから言えるだろう。

世界の食事にはどんなものがあるだろうか。

食事作法の違いを挙げてみよう。

食事のタブーにはどんなものがあるだろうか。

人種 この複雑なるもの

「日本へ行ったら日本人だらけだった！」

日本への旅行から帰ってきたばかりのパナマ人N氏が、ラテン・アメリカ人特有の大きなジェスチャーとともに話しかけてきた。

「セニョール シミズ。ハポン（日本）は実に良かった。でもその中で、一つ目について驚いたことがあった。それはどこへ行っても同じ顔の日本人だらけだったことですヨ」

「だらけ」という言葉の使い方も面白いが、これはユニークな発想だ。ふだん、人種のモザイクの中で生活している彼だからこそ、目に付いた“発見”なのだろう。

大多数が一民族からなる、島国に住む日本人にとってはごく当たり前のことであって、そんなことを日常的に意識したり考えようとすることはほとんどない。

ところが、ラテン・アメリカでは、ほとんどの国が、最低3から4種の肌色を持った市民から成り立っている。昔からいる先住民のインディオと新大陸発見とともにやってきた旧大陸（ヨーロッパ）の白人、奴隷と移民の二つの時代に入ってきた黒人、そしてその混血である。この縦につながる征服と混血の歴史が、今、横に人種、肌色の断面となって映り出ていると言える。ただし、コスタリカ、ウルグアイ、チリのように、もともとインディオが少なかったか、あるいはインディオを征服の際に絶滅させてしまった等によって、ほぼ白人だけから構成されている国もある。

そして、**人種のもつば化**の進んだブラジルのように「混合」ないし「多様」を正常とし、そこに安定感があり、「単一」をむしろ特殊と見なす国さえあるのである。

ここパナマも、人口約 300 万（2002 年）という小国ながら、運河の建設時代に労働者として海を渡ってきた黒人や他の有色人種、更にパナマ運河が太平洋と大西洋を、パナマ地峡が北米大陸と南米大陸を結ぶ“**西半球の十字路**”という地理的な特殊性が、いっそうの人種的複雑性と解放性を生み出している。

こうしたなかで、日本国内にいる限り意識にのぼらないこの人種問題のテーマが、こちらにいと、その深層では、被害者と加害者という二側面をもってかかわってくるのである。

機中で「黄色人種」として差別される

ベネズエラの国内便に乗ったときのことである。120 席ほどの機内に乗客は 30 人ほどだけだった。見回すと、東洋人はどうも私だけのようである。金髪のスチュワーデスの機内サービスが始まった。前方から次々と飲み物の希望をとっていく。と、私のところへ来ると、知らん顔で次の後ろの列に進んでいってしまったのである。

こちらがスペイン語も英語もわからないと思ったからとは考えられない。その素振りからして、明らかに私に対して意識をして差別をしているらしいことが伝わってきたのである。

こみ上げてくる屈辱感を抑えながら、それでも平静をとりつくろって私はスチュワーデス呼んだ。

「すみませんが、コーラを一つお願いします」

わざとハッキリしたスペイン語で注文をした。と、黙ったまま立ち去った彼女は、コーラと小さなつまみ菓子を持ってくると、ポンと私の膝上のテーブルに置き、また黙ったまま立ち去っていったのである。

サービスをモットーとする飛行機内でこんなことがあってもいいものか！ 到着地での仕事の時間中も、そしてその夜、床に入ってから、私にとって初めてのこの体験について思いめぐらした。そして「**やはり我々は、黄色人種に属しているんだなあ・・・**」と、改めて身をもって感じたのだった。

やや好意的な解釈をするなら、国際便でなく国内便であったことから、またこのときのスチュワーデスの性格や個人的な機嫌の加減から、このようになったのかもしれない。したがって、断定的な言い方はさけたいが、後味悪い一体験だった。

そうままにあるものではないが、人々の心の深層には、東洋人（黄色人種）に対するある種の蔑視の意識がひそんでいることが、たまたま機内のスチュワーデスの言動に出てきたものと私は感じた。

スポーツクラブで聞いたショックな発言

パナマにあるスポーツクラブに加入していたときのことである。権利金 1000 ドル、月々

の会費が 25 ドル。この権利金、会費のため、誰もが入会できるというものではない。施設を利用する会員を見ていると、一応、パナマでは中流以上の階層の人々、それにパナマ在住の外国人が主体となっているようであった。

そんなある日、このクラブの勧誘員が、運動後の汗を拭きつつ帰り支度をしている私に声をかけてきた。

「今、クラブの会員の追加募集をしているんですよ。誰か適当の日本人がいたら紹介してくれませんか。日本人だったらまだネグロ（ ）よりマシだからネ」

私はグッとこみ上げてくるものがあつたが、また思い直して、その場は冷静を装ってうつろな返事をした。

「ああ、心当たりがあつたらナ」

この“マシ”という、たった二字の短い言葉の中に、彼が常々抱いている人種への評価が凝縮している。彼の言おうとすることを、もう少し補足してみれば次のようになるうか。

このクラブの品位をたもつために、できることなら会員は全部白人で占めたい。黒人が増えると外見が悪くなってくる。とはいえ、会員獲得のためには肌色のみには拘ってばかりもいられない。要は権利金、月々の会費を払える経済的にもある程度豊かな人間が必要だ。そこへいくと、駐在の日本人は一般に小金を持っている。入会金何千ドルというゴルフクラブに入っている日本人もかなりいるようだ。彼らはいわゆる黄色人種で、体の格好も見栄えしないが、まあ、金払いはいいし、ネグロよりはマシだから……。

ネグロ：スペイン語で黒人のことを指すが、この例のように蔑称で使われることも多い。

パナマの人種構成はスペイン系白人が 10%、黒人が 15%、原住民のインディオ 10%、あとはすべて混血である。その混血にも、インディオと白人の混血（メスティソ）、黒人とインディオの混血（ムラト）、白人と黒人の混血（サンボ）、その混血同士の結合と実に多様を極める。

パナマでは法的に人種差別はない。事実、国立パナマ大学の総長や政府の一部の高官でも、黒人がその地位を占めている。私の黒人の友人でも、社会の第一線で活躍し、白人よりはるかに高給を取っている者もいる。要は本人の能力次第とも言える。

しかしながらその半面、一般企業の秘書などの募集広告が新聞に出ると、その応募条件に必ずといってよいほど「容姿端麗」の項目が入っている。条件の要求する通りとなるためには、肌の色も関係してくるだろう。特に秘書でなくても、肌色の白い子と黒い子を並べて「いざ、どちらか」となれば、白い子の方が有利のようだ。

“名譽白人”として遇される日本人

この同じ原理が、スポーツクラブの勧誘にも働いていたわけなのである。そしてもとが黄色人種の日本人に対しては、一応“名譽白人”として遇していると言えまいか。

パナマのみならず、北南米大陸、そしてヨーロッパ、アフリカ等に駐在する商社マン、

企業の出張員に対して冠されたこの“名誉白人”の地位は、実は日本の経済力、また現地
に駐在する彼らの金回りの良さによってかちとられたものなのである。

そして実は、その“名誉白人”であるという意識が、今度は同じ黄色人種であるアジアの同胞を差別しようとする潜在的な意識へとつながっているところが、これまた、人種問題を考えるにあたって複雑さを生み出しているのである。



パナマのユリの花

「中国人」として同一視される心理

パナマ市内の商店に買い物に入った。店員が近づいてきた。

「ケ・デセア・チニート？」

「いらっしやいませ！ 何になさいますか？ 中国人さん」とのあいさつである。

一般に、この「チニート」とは中国人に対する親しみを込めた呼び方である。ここでは自分は顧客である。むろん、話しかけ方、言葉の抑揚からして悪気があって「中国人さん」と言っている様子は毛頭ない。私自身はそのことに特に拘ろうとせず、必要な買い物を済ませると「ありがとう」とそのまま店を去ったのだった。

この店に限らず、どこに行っても 10 回呼ばれるうちの 8 回はこの「チニート」である。パナマに赴任した当初は、中国人と一緒に見られたことに対して抗弁したこともある。

「ノ ソイ チノ。ソイ ハポネス（自分は中国人ではなくて日本人です）」と。

今、分析してみるに、その抗弁の陰には次のような心理が働いていたように思う。

自分は確かに東洋人である。しかし同じアジア人でも中国人と日本人は違う。その証拠には工業の発達度、文化の水準だって日本の方が進んでいるではないか。同じような顔立ちと体つきだけど、少なくとも日本人の方が、着ているものも習慣も西欧風ではないか。

そしてこれは、今も「チノ」と言われたとき抗弁しようとする一部の商社マン、企業出張員の心理に共通するものではないだろうか。

だが、文化といえば一体どちらが優れているのか。かつての日本の文化の大部分は、中国から朝鮮半島を通って渡ってきたものではないか。しかも経済力、また工業の進展度が、必ずしも文化水準の高さ、また人間の価値を決めるものでもあるまい。

こんなことを考えた結果、私は「チニート」と呼ばれても別に拘らず、どうしても必要なとき以外は訂正することをやめることにした。

そもそも、日本人が世界に対してもっている知識ほど、世界の人々は日本のことを知っていない。平均的国民が外国のことをよく知っているという点で、日本の右に出る国は世界にそうざらにはあるまい。日本が中国大陸の一部であると思っているようなラテン・アメリカの人がまだ多くいる状態なのだから。

ところでこの潜在意識は、本土に住む日本人の外国人に対する態度の中にも映り出ている。

今も残る“脱亜入欧”のかげり

一般に、日本人は外国人に対して親切といえるだろう。例えば東京の街角で、外国人が迷ってでもいようものなら、すぐにどこからか助け船が現れる。もっとも語学オンチといわれる日本人にとって、片言の英語でも話しかけるのには勇気のいるものだが、身振り手振りでもその外国人を助けてあげようとするだろう。

しかし、その道に迷った外国人という場合、大体が“白い肌、青い目と金髪”。これが東洋系の外国人だったらなかなかこうはいかない。

そもそも、明治の「脱亜入欧」() 思想以来、日本では一般にガイジンといえばアメリカ、ヨーロッパ系の青い目と金髪を連想した。最近かなり変わりつつあるが、日本人はアジアの中で名誉白人的な優越感を持ち、一方でアジアをさげすむ傾向があるように思う。また無意識の中に肌の色で人間を差別する意識、人種に対する偏見を持ってしまいがちだが、それは誤りである。それを乗り越え、昇華していくのは、教育と知性の発達、そしてその根底となる思想、哲学、宗教にかかわってくると思うのである。

脱亜入欧：アジアを離れヨーロッパの仲間入りをする。アジアの軽視とヨーロッパの重視という姿勢をみせた、明治以降の日本の風潮を評して言う。

国際化した社会で、なぜ人種問題を理解することが大切なのだろうか。

自分の心の中に人種を差別する意識はないだろうか。

黄色人種と“名誉白人”についてどう思いますか。

スペイン語とスペイン文化

発音しにくい？「シミズ」

特派員という仕事柄、国際電話をかける機会は多い。その都度、「ああ またか」と思いつつ交換手とやりとりをしなければならないのが自分の名前の確認である。

「だからさ、つづりは エセ、アチェ、イ、エメ、イ、セタ、ウ・・・」

これは、SHIMIZUの文字をスペイン語読みにしたものである。そもそも「清水」などという姓は、スペイン語圏ではもっとも発音しにくく、覚えにくい姓のようだ。これは[SHI]という発音がスペイン語にないこと、また「イ」「ウ」のスペイン語の閉母音が続くからである。これに反して「中川」(NAKAGAWA)など、すべて「あ」つまり開母音が連なる名前は、同じ日本人でもまだ発音されやすく覚えられやすい。

ずいぶん煩わしい感じもするが、日本でも「伊藤」「伊東」「橋」「端」「箸」と、同じ発音でも文字が違うことを考えてみれば、やむを得ないことかもしれない。

こうした電話の応答、日常会話を通してぶつかってきた日本語とスペイン語の対比について触れてみたい。なぜなら言語の対比には、必然的に文化の対比また生活慣習、伝統の

対比が映り出ているからである。

影が薄い「謙譲」の表現

一口に言って、スペイン語は日本人にとって英語より発音しやすいのではないかと思う。それはスペイン語の場合、「アエイオウ」の母音が日本語と同じで、つづり字をそのままローマ字読みすれば、発音の原則を知らなくてもほぼ通ずるからである。また日本人には発音しにくい英語のあのつまった音は数少ない。

例えば、Él es alto. (英語では He is tall = 彼は背が高い、となる) を「エル エス アルト」と発音すれば通ずる。

ただし、文法は動詞の活用がかなり複雑である。それに単数、複数、人称、過去、現在、未来、それに直説法、間接法と一つの動詞が数十にわたって変化する。そして名詞、形容詞には男性、女性の「性」があり、これが文中で一致しなければならない。

半面、日本語のように相手の身分、年齢、社会的立場によって使う言葉が異なることは少ない。早い話、キューバではカストロ首相も恋人も同じ「tú (「あなた」「君」に当たる親しい間柄での呼称)」で呼ばれている。

これに対し、日本語のやりとりを聞いていれば、およそ二人の上下関係はわかる。しかもスペイン語には「豚児(とんじ)」とか「愚妻(ぐさい)」といった謙譲の表現がない。いや、謙譲という姿勢がラテン・アメリカでは少ないように見える。スペイン、ポルトガルによる征服の歴史と明るい太陽の下で、日本的な奥ゆかしさとか謙譲の美德などは育たなかったのであろう。

ちなみに、皿を落として割ってしまったとき、日本人だったらとっさに「すみません」と口から出るに違いない。丁寧な人は更に「私の責任です」などと追加するだろう。それが美德なのだ。だが、この美德は必ずしもラテン・アメリカには通用しない。こちらでは「セ・メ・カヨ・エル・プラト(皿が落ちてしまった)」と表現し、簡単に「自分の責任です」などと言ってしまうお人好しは少ないのである。

一方、日本語には名詞に「性」がないどころか複数形もない。動詞は人称、単複数によっても変化しない。半面、同義語の過多がある。ちなみに、私、我、僕、俺、あたし、うち、てまえ・・・と、同じ自らを表現するのに実に多くの単語が使われる。スペイン語なら [Yo] 英語なら [I] の一語である。こうした言葉の違いが思考形態、行動の違いを生み出しているのもまた逆の面の真理なのである。

「いただきます」の言葉がない!

炎暑の続くパナマの乾季のさなか、地方都市に住む友人 F 氏を訪れた。遠路ようこそ、というわけで、F 氏は奥さんと昼食を用意してくれた。

誘われてテーブルについた。鶏肉の混ぜご飯の香りがただよってくる。ともかく暑い。外側に水滴を帯びたコップの水にまさに喉から手の出る思いだ。

「どうぞ召し上がれ」

F 氏のすすめにフォークを握りかけてふととどまってしまった。

「.....」

「いただきます」と言おうとしたのだが、言葉が出てこないのだ。いや、正確に言うと「いただきます」に該当するスペイン語がないのである。とはいえ、モソモソと黙って食べ始めるわけにもいかない。そこで「**グラシアス(ありがとう)**」と、何にでも通ずる無難な言葉でその場をすごした。

そういえば「ごちそうさま」に当たる決まり文句もない。私はこの機会を利用して、食事前後の挨拶、動物の擬声、諺の違いなどについてF氏に聞いてみたのだった。

言葉は生き物。それ自身文化であり思考形式である。したがって外国語を学ぶということは、その国の人々の慣習、文化自体をも理解することの必要性を教えている。

「コケッココー」は「キッキリキー」

例えば、日本語の「**ハラを割って話す**」「**水に流す**」といった言葉を、もし各単語通り直訳したらどうということになるか想像がつかだろう。まさか話す前に切腹する人が出るとは思われないが.....

食事の途中、庭から猫が入ってきた。我々のおこぼれでも欲しそうな顔をして上を見上げています。そういえば猫に関係した言葉の概念も違っている。

「**猫に小判**」「**猫の手も借りたい**」「**借りてきた猫**」などの表現も、スペイン語では考えられない日本独特の「猫」の概念からきている。日本の社会でその生活体験を通してイメージ化された猫があって、初めて真意が伝わるのである。

ついでに猫の鳴き声はこちらでは「**ミャーオ**」であり、鶏は「**コケッココー**」ではなく「**キッキリキー**」である。同じ動物の声を人間の言葉に置き換えると、こんな違いが出てくるのも面白い。更に「**ざんざん**」「**しとしと**」「**ごうごう**」といった擬態語は、それぞれの国語特有のイメージと概念の結びつきといえるだろう。かつて腹痛を起こして病院に駆け込んだとき「**シクシク**」痛むのか「**チクチク**」あるいは「**ズキズキ**」それとも「**ジーン**」と痛むのか、表現の言葉がなくて困った経験がある。

短歌、俳句を理解してもらうことの難しさ

F氏との対話はもう一つ展開、日本の**短歌**、**俳句**にまで話しが及んだ。地方銀行の支店長を務めるF氏は、すでに2回訪日しており日本事情にはかなり詳しい。だがその彼にして、日本独特な短歌や俳句の世界を理解してもらうことは至難の業に近かった。

「古池や かわずとびこむ 水の音」

この芭蕉の名句を仮にスペイン語に訳せたとしても、説明的な長文になってしまって、このきれいな音律や余韻を再現するのは不可能に近い。まして、この俳句からにじみ出る、いかにも日本的な情感などは、太陽のざらざら照りつける熱帯パナマでは想像もできない。「**ワビ**」とか「**サビ**」あるいは「**幽玄**」などといった感覚は、そ



うした自然環境に生きてこそ初めてわかるものなのである。

かように、一つの言語を学ぶということは、その言葉の出てくる発想体系、更にその土壌となっている文化の違いを知ることが大切になってくる。

友人F氏は、私の持論にうなずきながらフォークを口に運んでいる。私もまたスペイン語を根底から理解することの難しさを改めて思いやってみたのだった。

食後のコーヒーも終わった。「ごちそうさま」に当たるスペイン語がなく、私は再びどこでも通用するあいまいなスペイン語でお礼を言った。

「グラシアス セニョーラ（奥さん どうもありがとう）」

自分が知っている外国語（例えば英語）と、日本語との違いと特色をわかる範囲で挙げてみよう。

ニッポンと日本人

日本製品の広告が他国を圧倒

飛行機を降りて空港を出る。と、どこの国でも市内に至るまでの道路に電気製品、自動車、精密器械などの看板広告が立ち並んでいる。そのなかで必ず日本製の商品名も目に入ってくる。いや、他国を圧倒しているといっても過言ではない。しかもそれが、最も良い場所に陣取っているのである。

飛行機に用意された英語あるいはスペイン語の雑誌、また各国の電話帳の最高広告料金欄を占めているのも、多くは日本製品の広告である。テレビにも次々とコマーシャルが登場する（ついであるが、日本の漫画も現地の子供たちの間では人気の的だ）。

飛行場からホテルまで、あるいは仕事に合わせて出張先では私もよくタクシーを利用する。これまでの経験から計算すると、仮に10回乗ったとして（国によって差があるが）そのうち6回は日本製車とみてよいだろう。たまたま拾った客が日本人だとわかると、よく運転手が自慢げに話しかけてくる。

「ダンナ、日本からかネ。この車、日本の×××だけどガソリンも食わずよく働きますぜ。長持ちするしネ」

なるほど、運転席の横には日本の有力自動車メーカーの名前が入っている。こんなお世辞にあうと、こちらもその自動車会社のセールスマンでもないのに、ついその気になってチップでもはずんであげたくなってしまうのもニッポン的人情か。

特派員として赴任した直後だったが、新パナマ運河条約の批准交換のために米国のカーター大統領がパナマを訪れたときのこと。米の中南米政策の歴史が新たな局面を迎えようとするときであった。ホワイトハウス付きの報道陣を初め、世界各国から200人余の腕ききの特派員がパナマに押しかけてきた。

噴き出る汗をぬぐいながら、私も彼らと一緒にこの歴史的な瞬間をカメラにおさめていた。このときの彼らの愛用するテレビ・カメラ、カメラ機材の大部分がこれまた日本製だ

った。良い意味でも悪い意味でも“メイド・イン・ジャパン”はすでにニッポンと日本人の“顔”となってきたのである。

ところで、こんなにも日本製品はラテン・アメリカにも浸透したが、さて日本という国また日本人そのものに対するラテン・アメリカの人の理解度となると状況はまったく変わってくる。

経済進出ほどに進まない理解

テレビのメーカー名は知っていても、日本製時計の性能のよさを自慢していても、日本という国がどこにあるのかさえはつきりわからず、よく中国大陸の一部と間違えられることがいまだにあるのである。

もっといえば、低い背丈で、めがねをかけ、何かとせわしなく動く黄色人種があんな精巧なものを作り出せるはずがない、とさえ思われているちょっとショッキングな反応さえ一部にある。

経済進出と比例して、日本と日本人への理解も進むだろうというのは、こちらの都合に合わせた独りよがりな解釈と錯覚に過ぎない。国そのものへの認識、また人間同士の理解の段になると、まだまだはるかに遠いのである。

一方、ヨーロッパからはこの日本の経済成長に関して「**ウサギ小屋**に住む日本人は福祉の充実も少ないなか、個人や家庭を第二義にして働いてきた。それに公害対策にろくにお金も使わないものだから、物が安くできるのは当たり前」との、一部に皮肉と羨望のまざった批判もあった。

一方、東南アジア諸国の持つ日本または日本人へのイメージは「アジアの金持ち。でも目はいつも欧米に向いている」「日本は身勝手に自分の利益しか考えない」「団体となると日本で見ると行儀のよい人々とはまったく別人になってしまう。外に出ると“**醜い日本人**”が映り出ている」「われわれは観光客が落とすお金は欲しいが、日本人は嫌いだ」といった厳しい声も出ている。

一般に、日本人ほど海外の日本評、日本人評を気にする民族はないという。国外の第三者の指摘に基づき、己を見つめ、己を改め、それが世界の安定と平和に貢献できる助因となれば大いによい傾向かもしれない。この項は、その海外から見たニッポンと日本人を考えるにあたっての一導入部である。



ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ
の国境にあるイグアスの滝

アマゾンの上空での会話から

7月。冬朝の濃霧の中、サンパウロを飛びたつたジェット機は、広大なブラジルの国土を一路北上していた。

私は、これからの訪問地である**ブラジリア**と**アマゾン**についての資料を座席のテーブルに広げていた。隣には髪を肩まで伸ばした日本人青年が座っている。土地の人らしい。久しぶりに日本人と居合わせた懐かしさと親しみも手伝って、さっそく私は見開いたアマゾンに関する本の頁を示しながら質問を投げかけた。

ところが 。

「ワタシ、ワカラナイデスヨ」

意外にも、彼から返ってきたのは片言の日本語だった。まして漢字の入った本なんて「マッタク、ワカラナイ」というのである。

そうだ、こちらがうかつだった。認識が足りなかったのだ。ブラジル日系人社会で、ポルトガル語による教育を受けた二世、三世はすでに完全に母国ブラジルに同化している。人種的に日本人に似た顔、必ずしも国籍的に日本人、また日本語が話せるとは限らないのである。

これは私にとっては“新しい発見”であった。以後、ブラジルで日本人顔の若者を見ても、果たして日本語で話しかけてよいものかどうかしばしばとまどったものだった。

日系移住者が築いた信用

ところで、中南米への移住史をたどっていくと、明治32年にペルーへ790人が渡航したのが南米移住のさきがけであった。ついでメキシコ渡航が盛んになり、同41年(1908年)には「**笠戸丸**」がブラジルのサントスに入港し、781人の契約移住者が上陸したことをもって、ブラジルへの組織的移住が本格的に始まった。もちろん移住といっても、当初の人々の心構えは出稼ぎであって、ペルー、メキシコなどの場合はほとんどが単身者であった。

最初から家族同伴のブラジル渡航者も、お金をためて成功し日本に帰国するのが本願だった。だが、コーヒー農園の労働賃金は低かった。ここでは婦女子も働けるということで家族単位で渡航したのだったが、実際は家族全員が働かなければ生計が立たなかったのである。移住史の当初、日本人移住者は従順で、黙々とつらい労働にも耐える遠いアジアの国の短期労働者であり、黒人に代わる労働力と見られていた面もあったのである。

低賃金、重労働、疾病、熱暑の風土に耐えながら、それでも人々はその土地なりの生き方を身につけ、次第にブラジルの土の中に生活の根を張っていった。**ピメント(黒胡椒)**は東南アジアの特産物だったが、気候の似たアマゾン川流域での栽培を成功させたのも日本人。新鮮な野菜栽培、園芸農業を当地に盛んにさせたのも日系移民だった。

一方、契約農業労働者からサービス業や小売商へ転身していった移住者も数多くいた。そして“少なくとも子供だけは”と、子弟の教育に力を注いできた日系人社会で、やがて弁護士や医師あるいは軍人や政治家となってブラジル社会で活躍する二世、三世が出てきたのである。今、ブラジルで日系人の子弟といえば、どこでも学校の成績がよいというの

が相場となっている。

ブラジルの隣アルゼンチンでは、いわゆる日系人は戦前、沖縄からの移住集団が主流となったが、その大部分が花栽培かクリーニング業に従事していた。ここでも勤勉で誠実な日系人移住者は、現地社会からも高く評価されており信頼も厚い。一般に痴情沙汰で殺傷事件などが多いラテン・アメリカの社会で、日本人が引き起こす傷害事件等は皆無に等しいというのである。

なるほど、私自身どこへ行っても「ハポネス(日本人)」と好意の目で迎えられ、同じラテン・アメリカでも“東洋人”として被差別感、違和感を受ける一部の国と比べて、滞在中、不愉快な思いをすることは一度としてなかった。

近年、ラテン・アメリカへも進出の著しい日本の企業、商社の伸張も、こうした草創の日系移住者が営々として築いてきた信用が土台となつてのことである。

時代の流れは、また人の流れも作り出す。かつて、行き詰まり状態だった日本の外に活路を求めて渡航したブラジル移民者の子弟が、今また日本の経済力の押し上げと居住国の経済不調のなか、“出稼ぎ日系ブラジル人”となつて、あるいは日本への永住者となつて、日本で働いている。半世紀単位で世界の歴史を見たとき、とりわけ近年は、日伯(日本とブラジル)関係のみならず、各国、各地域の盛衰の激しさに驚かされる。

どこにあつても、いかに時代が変わつても、歴史認識と、友好の時代を築いてきた草創の開拓者に対する配慮と感謝の心だけは失つてはならないだろう。

小話ではこんなふうには語られている

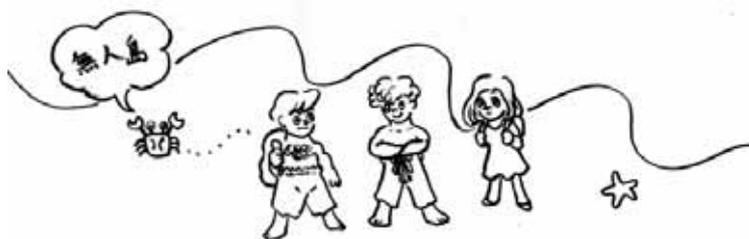
無人島での男2人と女1人

話を移民時代から再び世界を闊歩する日本人ビジネスマンに移してみよう。

あるときカリブ海洋上でハリケーンに遭遇した船が沈没した。船客のほとんどが海に呑み込まれてしまったなかで、奇跡的に2人の男と1人の女が助かり、無人島に流れ着いた。このとき男2人は1人の女をめぐるどのような行動をとったか。

フランス人は正夫(正式に結婚した夫)と二号に、イギリス人は女性そっちのけで男同士が、そしてイタリア人は彼女をめぐる決闘をはじめた。さて、日本人はどうしたか。2人はあわてて「どこかにファクスかメールを送れる場所はないか」と探しに出かけていったのデス。

つまり、個人的な男女関係のことまで、いちいち上司の伺いをたてようとする日本人の国民性(性格)を揶揄(やゆ)した小話である。



実はこの話、ある新聞のブラジル特派員が紹介していたものだが、私も出張先で食後のくつろぎの時間などにこの小話を出してみた。

日本人ビジネスマンのトウキョウ本社との交信ぶりを知っている人たちからはドッと爆笑が沸き起こった。「いかにも日本人らしくていい」

日本人の勤勉さ、働きぶり、そして会社への忠誠心は世界的に知られるところとなっている。逆に言えば、だからこそ世界市場でもトップを行く優秀な製品が生まれてきている、とも言える。

このことを裏付けるもうひとつの逆の例のアメリカでの小話である。

自動車の本場アメリカで日本車が売れる理由

金曜日の午後にできた車は欠陥車。月曜日の午前中にできた車は買うな。なぜか？ 週休二日制の金曜日の午後ともなると、週末のためそわそわしてきて仕事に身が入らない。また月曜日は土・日曜日の遊びの疲労が残っているため、中途半端の完成車が生まれてくるから、というのである。

更にこの小話をもう一步発展させ、次のようにジョークする人もいる。

「イヤ、月曜日や金曜日でなくても、他の週日でも同じことサ。昼休みや終業時間がくれば、仮にねじを締めかけでもハイそれまで。さっさと弁当を広げるか、家に帰ってしまうからネ。ボルトの一本抜けた欠陥車が出てくるのは当然のことサ」

その結果、精密機械と同じように、もともと手先が器用な上に技術も革新、残業までして完成させた故障の少ない日本製車が売れに売れているのである。これは日本人の勤勉さ、技術の優秀さをアメリカと比較した、逆の意味での小話である。

タイタニック沈没時の各国男性の行動は？

もう一つ、よく知られたタイタニック号の沈没の際のエピソードである。

いよいよ巨船が海の中に沈もうとしている。乗船客を避難させなくてはならない。まず婦女子を優先させようと、船長は男性客に説得を試みた。

アメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないのか！」

イギリス人男性に：「あなたはジェントルマンの国の出身ですよ」

ドイツ人男性に：「あなたがたの国の法律ではこうなっています」

では日本人男性に対してはなんと行ったのか？

「みんながあのようにやっているから、あなたもそうした方がいいと思いますよ」

自分だけ飛び出ることを恐れる、他人と同じことをしないと安心できない日本人の傾向性を例えたものである。

小話の紹介が続いたが、ここでもう一つラテン・アメリカで知られた諺がある。

「1枚のコインには2面がある」つまり、一つの事象は二つの側面から見なくてはならない、との意である。

この論理からいえば、日本の企業また製品の優秀さという「表面」の陰には、個人また家庭生活の犠牲という「裏面」がある、といえるかもしれない。いくつかの小話には、個人より会社優先の日本人ビジネスマンの仕事ぶりが映り出ているのである。

欧米またラテン・アメリカでは一般に「仕事を見つける」という。ところが日本では「会社に入る」ということが多い。つまり就職は「個」を会社に従属させる儀式となっているのである。このように「勤勉」「忍耐」で代表される日本人ビジネスマン像も、国外に出てみると、またこちらの人々との生き方とを比べて見ると、会社中心主義のみでなく、よい意味での彼らの個人主義をもっと取り入れてよいのではないかと思う。お互いに刺激しあい、よい面を学びあっていく時代になってきている。

ラテン・アメリカへの移民の歴史と現在の状況を知ろう。

ここに挙げられた以外に、日本人についての小話を知っていたらみんなで話し合ってみよう。日本と日本人についての理解を深めてもらうにはどうしたらよいのだろうか。

国際人・国際化とは？

カリブ海のホテルで出会った日本人

「ハイ！ 一体これをどうしてくれるんだよ」

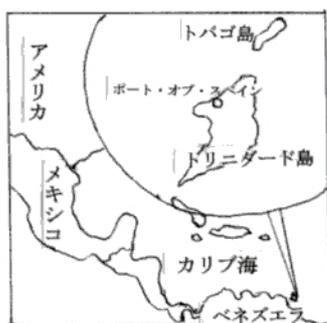
静かなホテルのロビーに突然、野卑（やひ）なわめき声が聞こえてきた。その場で歓談・休息していた10人ほどの宿泊客は、眉をひそめ一斉に声のするほうに目をやった。カリブ海に浮かぶトリニダード・トバゴの首都ポートオブスペインでのことである。

受付のカウンターでは、3人の男性がたむろして、ホテルの職員とやりあっている。伸びたヒゲ。乱れたポロシャツ。胸をはだけた一人が凄みをきかせるような格好でかんでいた。他の二人は、英語がある程度わかる彼にすべてをゆだね、けしかけているようでもあった。

「ひょっとしたら同胞かも？」。一瞬よぎったいやな予感残念ながら的中してしまった。中途半端な英語で十分に意中が伝わらないらしく、3人で打ち合わすときのかん高い日本語が聞こえてきたからである。



カリブ海の海岸



どうもアメリカドルからトリニダードドルへの両替のことで問題があったらしい。それにしても傍若無人の振る舞いである。私はなんとか言葉の面で手助けしようとしたのだが、ついついためらってしまった。

「ハイ」「ハイ」と、そのたびに下品な英語を使う。「オレ達は金を持っているんだゾ」というチラツキも見える。同国人であることを名乗るのが恥ずかしくなってしまった。

英語のできないのは仕方がない。だが、それ以前にもう少

し国際人として、いや人間らしく振る舞えないものか。

それにしても、カリブ海の南端にあるこんな小さな島国にも日本人が闊歩するようになった。近年、石油産出によるこの国の経済の潤いとともに、日本企業の進出も増え、建設関係の日本人労働者も入ってきている。

のっけからやや極端な例を引き出してきたが、この体験、海外における日本人を考えるにあたって示唆する点が多い。今やアマゾンの奥地、アンデスの高地、エクアドルのガラパゴス島など、地球の隅々まで日本人の足跡が刻まれるようになった。それだけに、世界のどこかで飛行機事故でもあれば、即座に「日本人乗客は」とのニュースが流れる。

半面、日本人観光客の心ない行為が、ときにマスコミのテーマになったりする。国際化した社会で、日本人の国際性が問われる時代に入ったのである。

そもそも日本人は「国際」という言葉が好きなようである。語学を主体とした各種学校の名称はわかるとしても「国際モータース」「国際カントリークラブ」・・・と、日本人のみを対象としたものであっても「国際」と名前の付く会社、団体、クラブは数え切れない。「国際」との言葉の持つイメージが、なんとなく世界性、進歩性を感じさせ、人々の国際志向の心をくすぐるのであろうか。

では、本当の国際性を持ち、国際人であるための要件は何か？ 語学ができることか？ 海外旅行の経験の多いことか？ それとも外人づきあいが上手なことか？ ここでは自らの国際性の未熟さを承知の上で、たまたま海外滞在が長いがゆえに得られた体験を通して、このテーマについて考えてみたい。

メキシコのレストランでの日本人観光客

夕方のメキシコ・シティーのレストランでのことであった。50席あまりを収容する広い部屋の一角では、テーブルをつなぎ合わせ15人ほどの日本人観光客が座っていた。すべて男性。どうも日中はティオティワカンのピラミッド史跡と船遊びで有名なソチミルコを訪れたらしい。やや興奮気味でその印象を語り合っていた。おみやげ用のソブレロ（つばの広いメキシコ独特の帽子）がテーブルの片隅に山と積まれている。

と、一人が手を挙げ大声でウェイトレスを呼んだ。

「ネーチャン」

はっきりとした、しかもやや卑俗な印象を与える日本語である。近づいてきたウェイトレスに、今度はこのグループの通訳らしい別の男性がスペイン語で勢いよくまくしたてた。

「一体どのくらい待たせるんかネ！もう注文してから30分もたつんだけどサ！」

周囲が再びこれに雷同して日本語でガヤガヤ騒ぎ始めた。ウェイトレスはその日本語が感覚的にわかったかどうか、スペイン語で先の男性に何かを説明すると奥に消えていった。

ようやく料理が出てきた。テキーラも十分にまわったらしく、興に乗ったそのグループは今度は大声で日本の歌をうたい始めた。レストラン内には家族連れの子供や、またアメリカやヨーロッパから訪れた夫婦連れの観光客が静かに懇談しながら食事をしている。

なかには明らかにイライラを押さえている感じの客もいた。

たぶんテキーラのほどよい回りが、旅の解放感に拍車をかけているのであろう。あるいは異国での新体験の連続に感激し、その一方でホームシック的な心情が日本の歌を高吟させたのかもしれない。



ソチミルコの船遊び

海外では「外国人」の自覚こそ

でも、これが仮に一人だったらこうした光景は決して起こりえなかつたであろう。元来が外では引っ込み思案の傾向が強い日本人のことである。ただそれが団体となったとき「赤信号 みんなで渡ればこわくない」心理が働いてくるのである。このグループも、会社あるいは地域の「団体さん」だったかもしれない。そこには日本人特有の群れ歩きや、個人主義の未発達が反映しているともいえる。まして夫婦や家族単位での旅行が主体のヨーロッパに対し、男性のみという欧米の感覚からしたら、やや異常な旅行団の性格も副因となっていたのであろう。

そもそもラテン・アメリカにきたらラテン・アメリカの風習を尊重するのが自然の姿である。“郷に入ったら郷に従え”。「アスタ・マニャーナ（明日また）」のリズムの国で、注文の品がまだこないと、せかせかする方のギアの回転を調整しなくてはいけない。ここでは、時間をかけてゆっくりと食事の懇談を楽しむのが本来の姿であるからだ。

ところが、大型ジェット機のごう音と共に、目的地に着いた日本人は、寸分を惜しんで疾風のごとく観光地を駆け抜け、カメラのシャッターを押しまくっていく。そして札びらを切って観光地の土産品を買い占めていくのである。しかも経済的な優越感が、時に現地の人々の眉をしかめさせる言動へとつながったりする。

もともとが親日的なメキシコのこと。ひょっとしたらあのレストランの中には、日本語を理解するメキシコ人がいたかもしれない。となれば、ウェイトレスの心の奥まで思いやれる人間性がほしかったと思う。

日本から一歩足を踏み出したら、実はこちらが“外国人”なのである。ちょうど日本国内で外国人、または外国人観光団をしげしげと見つめるように、国外での言動のすべてが“日本人は・・・”と、現地の人々の目に映っていることをまず銘記すべきであろう。

国際会議では「3S代表」だって!?

かつて国際会議で日本人が[3S代表]とのニックネームを与えられたことがあった。3Sとは「Silence（沈黙）」「Smile（微笑）」「Sleep（居眠り）」の頭文字である。自ら発言する意欲に乏しく<Silence>、言葉がよく通じないが故になんとなく微笑でごまかし<

Smile>、全く意味がわからないときには、周囲もはばかりことなく船をこぎ始める<Sleep



> というのである。

もちろん、ラテン・アメリカでも国際的な活躍をしている日本人も数多くいる。南米の柔道マンとしてブラジルに歴史を残した前田光世、文化発掘史上で世界的に名の知れたペルー天野博物館館長の天野芳太郎博士など。また新千円札に登場した野口英世がアフリカのガーナに行ったことはよく知られているが、こちらエクアドルでも研究生活を送っている。その人類への貢献をたたえた胸像が今も街に立っている。

これらの人々に共通している面は、日本のよき文化を現地に伝え、現地の人々の幸福と文化の発展に貢献する姿勢、また海外で学んだものを自国の文明発展、民衆の国際意識の高揚に結びつけていることであろう。

国際人への要件は？

さて、こうした傑出した人物はそれとして、自分たちのような一般庶民が国際人たるための要件としては、これまで述べてきた例を通し、次の点が上がってくるように思われる。

1. 自国の文化に深い理解と愛情を持ち、機に応じてそれを外国人にも伝えることができること。
2. 他国の文化を理解し、現地の習慣や伝統を尊重、よい面は積極的に学んでいこうとする姿勢を持つこと。
3. すべての国の人々に共通な目標は、人間の幸福と世界の平和。その第一歩は人間と人間の理解から始まる。ゆえに、どこの国、どの民族とも友好理解を心がける姿勢があること。

以上の3点を達成するのに語学のマスターは必要条件。マナーの心得も大切となってくるだろう。ただし語学のみペラペラでも、テーブル・マナーにたけていても、伝える内容が空虚であっては条件には満たない。海外旅行経験の多さ必ずしも立派な国際人に通ずるわけでもない。

よく国際人になろうとして外国文化にかぶれ、日本文化への理解をないがしろにしたり、やたら欧米風のものでハクづけたがる人がいる。一方、日本の経済的な成長におけるがちという傲慢さも一部の日本人に見られる。

だが、今、マンガ、カラオケこそ世界のどこでも受け入れられ人気があるが、経済分野の進出に比して、日本の文化面は完全の入超となっている。日本製の商品と日本人観

光客は、世界のいたるところで見られるようになった。しかし、それは即日本また日本人への評価とはつながっていない。日本製品が求められるのは性能がよいからであり、日本人観光客が一見もてるのは、金払いがよいというごく単純な理由からなのである。

こうしたなか、駐在地で働きながら現地の人々との関わりを持つ人、ボランティアでその国の住民に貢献している日本人が増えつつある。これらの庶民との接触は、一見地味ながらお互いの文化の理解、両国の友好推進にも貢献しつつある。なによりもその基盤が庶民レベルの人間交流にあることが意義深い。

あなたも得られる！「国際人へのパスポート」

私自身、日パ両国の理解と友好の促進にいくぶんでも貢献できればと、パナマの一般紙に日本文化の紹介や、両国の文化比較の記事を何回か寄稿した(別掲)。また、父兄の一人として、開校まもない現地のパナマ日本人学校の校歌(別掲)も作詞し応募した。結果的に私の作品が選ばれたが、そこには児童が国際友好の心を育めるようなテーマも込めさせてもらっていた。



Heo aumentado las relaciones entre Panamá y Japón, día por día, en los últimos años, tanto en el campo de la política como en el económico. Cabe destacar entre éstas, la ayuda tecnológica y la donación de equipo a varias instituciones panameñas a nivel gubernamental, por parte del Gobierno japonés.

Los productos japoneses abundan en el mercado panameño, tales como automóviles, aparatos eléctricos de toda índole, cámaras, relojes, etc. Las estadísticas muestran que un cuarenta por ciento de las mercancías que atraviesan el Canal del Panamá Atlántico al Océano Pacífico van destinadas al Japón.

Actualmente se discute sobre la factibilidad de construir un canal a nivel con la asistencia de los tres países: Panamá, Estados Unidos y Japón. No puedo estimar si el canal a nivel se construirá o no, pero si es evidente que las relaciones entre Panamá y el Japón aumentarán año más en el futuro. También es un hecho que cada año aumenta la cifra de habitantes japoneses que residen en Panamá. Sin embargo, a pesar de estas circunstancias, no se conoce mucho sobre este lejano país, ni sobre los japoneses, su cultura, más que a través de las mercancías que provienen de ella.

A-148
sobre Japón. Por otra parte, algunos de mis amigos me han expresado su interés por conocer sobre la cultura y costumbres orientales. En realidad, existen bastantes diferencias entre el Oriente y la América Latina.

A su vez, ocurren algunos casos en los cuales los japoneses que llegan a Panamá desde el Oriente, después de atravesar el Océano Pacífico se asustan o sorprenden ante la diferencia que hay en la cultura, costumbres y mentalidad de la gente latinoamericana. Una de estas costumbres, por ejemplo, es la cantidad de fiestas que se celebran, el concepto que se tiene del tiempo y el clima caliente que prevalece todo el año, sin tener el cambio de las cuatro estaciones, y así por el estilo.

También hay muchas cosas que los japoneses desean aprender y aplicar de parte de los panameños.

Es realmente imprescindible entender y conocer la diferencia entre ambos países y desarrollar el intercambio cultural y humano, para así lograr una mejor comprensión de ambos países.

Existe la tendencia generalizada de creer, que la política se mueve por el poder y la economía se mueve por la ganancia y la pérdida. La política económica es que si no hay ganancia, la empresa se retira de una vez, diciendo adiós.

Confío en que el hecho de conocer acerca de la cultura, las costumbres y la mentalidad de la gente de otros países, en ese caso, Japón, aumentará aún más el vínculo ya establecido en los campos de la política y la economía.

Ahora bien, soy corresponsal del "Tokyo Shinbun", el diario de la organización laica budista más grande que hay en el Japón y que tiene una circulación diaria de cinco millones de ejemplares. Me dedico a cubrir las actividades budistas y culturales en América Latina, luego envío los artículos y fotos a Tokio, siempre con la intención y el deseo de presentar la América Latina a los japoneses. En esta forma, trato de contribuir modestamente en promover las relaciones amistosas y la comprensión mutua de ambos países.

Asimismo, considero que presentar las costumbres y la mentalidad de los japoneses a los panameños, ayudarlos y contribuir a cimentar la amistad entre ambas naciones.

Es posible que algunos artículos destaqué la impresión de que estoy criticando a Panamá y a sus habitantes, pero ésta no es de ninguna manera mi intención, sino más bien mi ferviente deseo de que este país, que he llegado a querer y respetar, se desarrolle y prospere aún más. Además, deseo sinceramente que Panamá, así como

se le llama "PUENTE DEL MUNDO, CORAZÓN DEL UNIVERSO", sea también PUENTE DE LA AMISTAD, PUENTE DE PAZ.

Abrijo las esperanzas de que yo pueda contribuir con un granito en establecer un "puente de amistad" entre Panamá y Japón.

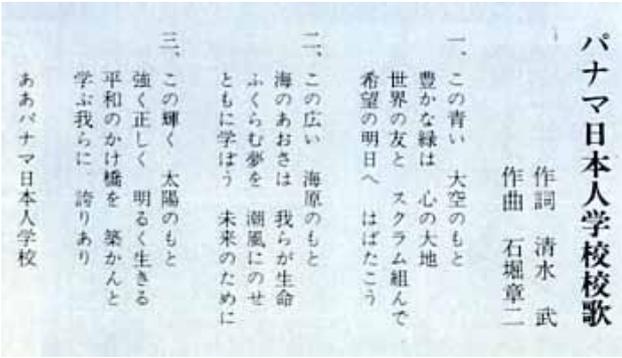
Como referencia, les diré, que comencé a estudiar el español hace seis años al llegar a Panamá, pero recuerdo que todavía me falta mucho por aprender. Por esa razón, he pedido la colaboración en la redacción en español de estos artículos a mis respetables amigos panameños.

Mi próximo tema de esta serie de artículos será, "Hora Panameña".

に私の作品が選ばれたが、そこには児童が国際友好の心を育めるようなテーマも込めさせてもらっていた。

④パナマの全国紙「ラ・エストレジャ・デ・パナマ」の紙面。日パ両国の文化比較のシリーズの第1回目(1983年3月15日付け)

⑤パナマ日本人学校の校歌



またNHK学園高校の教師をしていたとき、まだ冷戦時代のソ連を訪問したことがある。そして新聞の特派員となって“カリブの赤い星”キューバにも足を踏み入れる機会に恵まれた。両国の国際政治面での戦略的な動きには納得しがたい面もあった。でも街角で会った市民は

みな親切で愛すべき人々だった。今も心の中に懐かしく生き残っている。

国家レベルのイデオロギーに批判はあっても、そこに住む市民は誰も幸せと平和を求めている。多様化する国際社会で、こうした人間と人間の心を通わせての交流こそ、新

たな道を開く一歩となることも多いだろう。時代は「国際」から「民際」に入ったともいえる。

文化や考え方が違うからこそ、刺激を受け心が豊かになる。他者との違いや多様性は、それを尊重し、よい面を取り入れることによって、より豊かな果実をもたらす。

「島国」とは、逆の面から見れば海を介して全世界に開かれているということでもある。今ほど各国との友好の確立、また世界平和の実現のために、本当の意味での国際人また地球市民の出現が待たれているときはないだろう。そして今、自分自身と人々の幸せのために勉学に励む高校生のあなたも私も、国際人へのパスポートを得る要素を十分に備えているのです。

国際人となっていくためには、どんな要件が求められるだろうか。ここに挙げられている以外の点があればみんなで論議してみよう。

社会の貧富の格差

アングロ・アメリカとの対比

ラテン・アメリカの貧富の格差は、その**征服史**に発端を見ることができる。アジアに達するつもりで大西洋を西に向かって航行したコロンブスは、1492年、今日の西インド諸島のサンサルバドル島を「発見」した。航海は4回に及んだが、彼はその地を死ぬまでインド（現インドのみでなくアジアの東南部）の一部だと信じていた。先住民を「インディオ」と名付けたのもその故だった。

以来、黄金を求めて乗り込んできたスペイン人は、先住民を力で征服、略奪をほしいままにして獲得物資を本国に送り出した。こうした非人道的な殺戮と強奪、そしてカトリックの布教のなか、メキシコの**アステカ文明**、ペルーを中心とした**インカ文明**が歴史の底に消えていったのであった。

同じ新大陸到達（「発見」という言葉はヨーロッパサイドから見た史観であって、現地サイドから見ればこの地はもともとあったわけである。新大陸“発見”500年の1992年に論争が盛んになった）でも、アングロサクソン民族の移民による現在のカナダ、アメリカ合衆国はその歴史形成の過程が異なっていた。ここでもインディアンとの激しい交戦はあったものの、侵入者自身が新しい国作りへと開拓の息吹に燃えていた。

「開拓」と「征服」の歴史のなかで

開拓と征服　その違いは大きい。新天地でそこに骨を埋める決意で新しい国家建設に向かって出発した“**開拓者**”に対し、先住民の既存文明を破壊し、富を奪う“**征服者**”によって築かれた国家の違いが、現今の**アングロ・アメリカ社会**とラテン・アメリカ社会の顔に刻み込まれているのである。それは地球上の経済格差を表徴した、現今の「**南北問題**」ともつながってきている。

この旧大陸（ヨーロッパ）の支配から独立解放に力あったのがベネズエラのシモン・ボリーバルとアルゼンチンのサン・マルチンであった。しかしながら、住民の大多数を占めていたインディオ、黒人、混血者は、独立戦争の兵力として組み込まれはしたが、勝ち得た独立によって自らの身分を“解放”、格上げできたのはまれであった。こうした歴史の流れのなかで軍隊が次第に力を増していった。

中世ヨーロッパで立身出世の最も近道が「軍隊」と「教会」であることにテーマの背景をおいたのは、スタンダールの秀逸作「赤と黒」だったが、近年ノーベル文学賞を受賞したコロンビアのガルシア・マルケスの作品でも「族長の秋」などで、カリブ海にある架空の国の大統領の独裁ぶりを描いている。架空とはいえ、ラテン・アメリカにそうした素地、土壌があるからこうした作品が誕生し得たのだ。

実際には、官僚制度の未発達が軍人をしてその役割を担わせてきたともいえる。かつて日常的とまでいわれたクーデター（ ）も、政治の腐敗を憤り、国を憂える青年将校によるものといったタイプよりも、権力をめぐる争奪戦的な政変というイメージが多く目に付く。

国によって千差万別だが、ラテン・アメリカ各国民の所得は、アングロ・アメリカや日本のそれより低い。しかも、富の分配が公平に進むことが少なく、今もなお少数の富者と大多数の貧困階層といった経済構造が残っている国が多い。

一方、アルゼンチンなどインディオが少なく、国民の大部分がヨーロッパ系移民の国では、庶民の生活はまた別の像を描いている。インフレが進んでいるなかでも、街のレストランでは深夜の12時、1時まで一般市民が大きなピフテキとワインで食事を楽しんでいる姿もある。ラテン・アメリカの複雑、多様な断面が人々の生活にのぞいている。

クーデター：政権を奪い取る目的で行う武力行使。前近代的な国家で支配者間の対立を原因として起こることが多い。

同じアメリカ大陸にあるにもかかわらず、なぜアメリカ合衆国、カナダに代表されるアングロ・アメリカとラテン・アメリカとの国々と経済の発展に違いが生じてきたのだろうか。

空港が映し出すギャップと人間模様

日本は地球の果てにある？

世界地図を広げてみよう。南米大陸に注いだ目をずっと下(南)におろしていくと南端にある細長いチリにぶつかる。かつて硝石や銅で知られていたが、今は秀逸なワインの輸出国ともなっている。首都サンチャゴでは、つい2004年の11月に、APEC(Asia Pacific Economic Cooperation = アジア太平洋経済協力会議)の首脳会議が開催された。

さて、日本を図の中央にしたメルカトル図法で描かれた地図から見れば、この国は地図の右下、はるか地球の果てにあるような印象さえ与える。だがこれは日本製の地図で

見るからなのであって、チリ製の地図によるとそうではない。南北アメリカ大陸が中央に描かれた地図上では、日本が北西の“地球の果て”(日本製のメルカトル図法で描かれたイギリスほどの位置)に位置するような形で描かれている。

サンチャゴの国際空港の壁に掲げられた大地図を見てハッと思った。私たちの持つ世界地図観は、あくまでも日本を中心としたもの。各国は各国なりに自らの世界地図観を持っている。

世界を、また異なった国の人々の心を知るには、まずこんな単純な心のギャップの認識から始めなくてはならない。

ラパスの空港で高山病にかかる

チリからパナマへの帰途、ボリビアの首都ラパス(実質上の首都はスクレ)に立ち寄った。海拔 3700 メートル。世界一の高山都市。国際空港はさらに高いところにあり、海拔 4100 メートルで、富士山の頂上を優に越える。

トラップを降りると、私の脇を小型トランクをさげたアメリカ人が入国審査口に向かって走るように抜けていった。と、空港建物の入り口で彼はピタリとしゃがみこんでしまった。顔面も蒼白。空港職員が急いで酸素マスクを取りにいった。明らかに高山病のようだった。

空港のロビー出口では、出迎えの友が私の荷物のすべてを奪うように取ると、やや厳とした口調でこう言った。

「シミズさん、ここではアルコールは禁物。ホテルの風呂も入らないほうが身のためですよ」

どちらも血行をさかんにし、心臓に負担をかけるから、というのであった。さらに言った。「ラパスには火事はないし、泥棒もいませんからね」。酸素が薄いので火の手が広がりにくく、泥棒も逃げるのに息切れしてしまうから、と。

半分ユーモアも入っているのだろう。私は「そうすると、追いかける警察官の方もハアハアじゃないの？」なんて切り返して、やり取りを楽しんだものだったが……。事実、しばらく前まではこのラパスに消防署は一つもなかった。

メキシコの税関職員のやりとりから

メキシコ空港の税関。荷物のチェックを受けていると、後方から乗降客と税関職員とのかん高いやり取りが聞こえてきた。

「あんた、こどもがいるの？」

「いや、独身です」

「子供がいるのかと聞いているんだよ」

「いいえ、まだ結婚していません」

通関検査の台上に開けられたトランクの中には、日本製のおもちゃが大量に並んでい

た。あまりの数に係官はその用途を尋ねたらしい。数がまとまれば「営業用」とも考えられる。つまり、単なる「おみやげ」ではなく、利益目的の「商品」として関税を払うことが必要となるからである。引き続くやり取りでなんとか納得したらしい係官はオーケーの指示を出した。

それにしても、冒頭の会話は論理的にかみ合っていない。「子供がいるのか」と問いただしているのに「独身です」「結婚していません」。

「自分の子供はいません」と答えればよかったのだろうが、係官はメキシコ社会の構造を熟知の上での質問形式を取ったのだった。

つまり、結婚していなくても、独身でも、子供を2人も3人も持っているメキシコ人はいくらもいるからである。

国際空港 それぞれの風土の違いのみならず、社会慣習、文化の対比まで映り出ていて面白い。

パナマ運河の歴史と未来



パナマの国旗 国花「エスピリッツ・サント」 民族衣装「ポジェラ」

死闘を伴った建設の経過

パナマ市から北に車で30分も走るとパナマ運河のミラフローレス閘門に着く。同運河の太平洋側出入り口である。運がよいと、指定の展望台から10メートルほど先を、日の丸を掲げた日本国籍の船が通過するのを見ることができる。

パナマの国を運河なくして語ることはできない。いわば国そのものが運河であり、運河は即、国の命運を担ってきた。そもそもパナマは運河を機縁として独立した。以来、この国の歴史は運河を機軸に動いてきた。



1880年、フランス人のフェルナンド・レセップスが、スエズ運河を開通(1869年)させた勢いをもってパナマ運河の建設に取りかかった。しかしながら、状況はスエズと同じくは進まなかった。スエズ運河の通る北アフリカでは砂を掘った。だがここではジ<運河の太平洋側の出入り口> ャングルと岩盤、

そして相続く地滑りが彼を苦しめた。高温多湿の気候は、ツルハシを握る人夫たちを苦しめた。

アフリカも暑かったが、疫病は少なかった。しかしここでは黄熱病とマラリアで何万人と苦しみ倒れていった。予期しなかった硬い岩盤と地質、疫病の要因となる過酷な熱帯雨林性の気候 この地でスエズのような水平運河は実際的でないと結論に達し、水路を閘門で区切って船を上下させるロック（閘門）式に切り替えられた。

だが、資金不足からくる財政危機、その運用に関する疑惑、そして疫病と死者（約3万人）の増加が重なって、レセブスはその栄光の座から降りたのだった。

フランスから工事を引き継いだのはアメリカであった。工事再開にあたり、アメリカは徹底した疫病対策から始め、計10年、20億トンの土砂の採掘をみた



ミラフローレスのロック（閘門）運河が1914年に完成、太平洋と大西洋の歴史的結合を見たのである。

船は海面から26メートルまで上がる

運河は両サイドにそれぞれ三つのロックを持ち、水門で仕切られたロック内の水位の上下に合わせて船も上下するように工夫された。つまり、今、船が停泊中のロックの水位が、次のロックからパイプを使って流れ込む水によって同ロックと同水位になったとき、両ロックを隔てていた水門が開き船は前に進む。次のロックではまた同じ作業を繰り返す。下降するときはその逆である。こうして、ロックに流れ込む水の浮力によって、船は海面から26メートルの高さまで持ち上げられる。そしてこれを可能にするために、パナマ地峡の中央には人造のガツン湖が造成された。

全長約80km。出発地と到着地によって異なるが、運河の建設により、南米大陸先端のマゼラン海峡を回る場合と比べて、3000～8000マイルが節約される。平均的な船舶が運河を通過するには約8時間。近年は1日平均37隻、年13000隻以上の船舶が通航している。

運河は1999年末にアメリカが統治していた運河地帯とともにパナマに引き渡された。天然資源の少ないパナマにとっては、運河の通行料による収入から、この地理的位置そのものが、かけがえのない“天然資源”であると言える。



ミラフローレスのロックを通過する日本国籍の船とクイーンエリザベス号の風景

世界の二大運河であるパナマ運河とスエズ運河の違いと特徴を比べてみよう。

カリブ海の島々から



昔の伝統を今に生きるクナ族の世界

太平洋側にあるパナマ市の国内線空港から、セスナ機でパナマ運河に沿って北に20分、そこから今度は大西洋岸を東へ10分も飛ぶと、現代文明とはまったく異なった世界に接することができる。

パナマ地峡の北側、つまり大西洋(カリブ海)側には、200を超える小さな島が、はるかコロンビアとの国境近くまで約500キロにわたって、星がちりばめられたように並んでいる。どの島も直径が数十メートルから数百メートル程度。直径が1キロを超える島は数えるほどだ。

ここに先住民クナ族が住んでいるが、外界から距離をおき、カリブ海の貿易風のもと熱帯ヤシの茂る島の生活は、めまぐるしく煩雑な世界に住む現代人にとっては、まさにパラダイスのように映る。

ある学者によれば、クナ族は5000年前から歴史を持つという。だが、そのルーツはまだわかっていない。彼らはコロンブスによる新大陸到着以前の伝統のままを今に生活しているのである。

独自の言語、宗教、法律をもち、各島には長老会議があり、日々の問題が討議される。木と竹で組まれた、ヤシの葉ぶきの民家には扉もない。島に泥棒はほとんどいないからだ。竹で組まれた壁の隙間、また家の出入り口から差し込んでくる光が唯一の薄暗い家の中には床はなく、ハンモックが吊るされている。



特産ともなっている美しい「モラ」

島に入ってまず目に付くのが女性の独特な装身具。鼻の先に金の輪をつけ、首には幾重もある金色の首飾りをしている。衣装は何枚もの布を合わせて鳥や動物、あるいは抽象的な模様を描いたクナ族の特産「モラ」を使ったもの。そして足のふくらはぎには、ビーズ玉を糸でつないだようなものを脚絆(きゃはん=レッグウォーマー)のように巻いている。

男はまず「よく働くこと」が島のおきてとなっている。みんな働き者である。毎日、日の昇る前にボートに乗り、数百メートル先の対岸の陸地に働きに出かける。ここではヤシの実が生産され“輸出”によって現金収入の源となる。簡単な野菜も栽培される。そ

して妻、子供、両親に優しく、仲良く、正直に、お互いに尊敬しあって生きるのが先祖伝来の規律とされる。



一方、女性は夫に忠実で、子供の面倒をよく見ること、家また島全体をいつも清潔にしていることが義務となる。島は箒(ほうき)ではいたように美しく、トイレは島が汚れないように海の水面上に設置してある。

何枚もの布を縫い合わせたカラフルなモラ

こんな生活が何世紀も前から今に続いてきた。しかしながらここも、近年の観光客の増加による俗化、またラジカセに代表される騒々しい現代文明の一端が持ち込まれようとしている兆しもある。一方、首都パナマ市等の都会に出て、一般のパナマ市民と同じ服装で街中で働いているクナ族の人も多い。だが私は思った。仮に歴史の流れに取り残されようとも、美しいカリブ海で平穏な生活を送るクナ族は、あの科学技術文明という“怪物”に毒されない方が幸せなのではあるまいか。広いラテン・アメリカ、そして小さな国パナマの一角にも、現代に異質なこんな世界もあることも紹介しておきたい。

先住民の生活や文化の変容について考えてみよう。

科学技術文明の発達とは即ち、人類に幸福をもたらすものだろうか。この島の例に倣って、両親や祖父母の時代と現代とどちらが人間にとって幸せだと思うか、家族に聞いてみよう。

ティオティワカンのピラミッド

頂上で生贄(いけにえ)の儀式が

足を次の階段に引き上げるテンポも次第に落ちてきた。心臓の鼓動も早くなり、呼吸も乱れがち。胸を突くような急傾斜である。振り向くとそのまま下まで転げ落ちていきそうになる。メキシコ市郊外にあるティオティワカンのピラミッド。

ようやくたどり着いた頂上は、岩と石で激しい凹凸をもった台地だった。躍る心臓を静めながら四方に目を投げかけた。ピラミッドの裾野からは、広漠とした草原が広がり、遠くには農耕地も見える。向かい前方にはもう一つのピラミッドがそそり立っている。

「月の神殿」。高さ 42 メートル。そして足下のピラミッドが「太陽の神殿」。高さ 65 メートルである。

エジプトのピラミッドは帝王の墓として築かれたが、ここメキシコのティオティワカンのそれは、原住民インディオの神殿で、祭礼の儀式に使われた。

下からはるかに見上げるピラミッドは、日に干して固めた泥のレンガと石で築かれて

おり、正面には石の階段がついている。

「ティオティワカン」とはメキシコの古語で「**神々の都**」との意味だという。インディオたちは、このピラミッドの上で奴隷や捕虜を生贄（いけにえ）とし、その胸を切り開き、まだ動いている心臓を神にささげたという。

ピラミッドのできた紀元前4世紀といえ、日本では弥生時代の初期であった。このころ人々はすでに**トウモロコシ栽培**（ ）を中心とする農業を営んでおり、神殿はその豊穡（ほうじょう）を祈り、大自然の脅威から守られるためのものだったと推測される。

驚くべき古代の宗教観と現代と・・・

ところで、生ける心臓を神にささげるという人身御供（ごくう）の儀式は、次に述べるマヤ文明のなかにも見られる。ティオティワカンではそれが奴隷や捕虜であることが多かった。だが、マヤでは一般家庭の子女もその対象となった。

“いけにえ”になる女の子は最高の幸せとされた。その日は、美しい最高の衣装をまとい誇りにあふれて祭壇におもむいたという。「神に召される　こんな幸せなことはない」と。



「月の神殿」から[太陽の神殿]を見る

今から見れば驚くべき**宇宙観**、**宗教観**だった。だが、考えてみれば、今から数千年後の人類が見た地球とて同じことが言えるかもしれない。

人間生命を蝕む公害や、一瞬にして巨大な犠牲者(人身御供)を出す原水爆を許したままの現代の科学至上信仰を、未来人が、現代文明の象徴であるコンクリートの廃墟に立ちながら分析、論ずるかもしれない。

いや、そんな史跡となる前に、人々を幸福に、世界を平和に導く生命尊厳の哲理、宗教観の確立が望まれよう。

こんな思いをあれこれとめぐらせながら「太陽の神殿」から幅50メートル余の「死者の道」を「月の神殿」に向かう私に数人の物売りが寄ってきた。

「ダンナ　コレ　ヤスイゼ　マケトクヨ」

ぎこちないがかなり使い慣れた感の日本語である。手に銀製の皿や石製らしい首飾りを抱えるようにして見せている。そう、そういえば、ここも日本人観光客のメッカなのだ。

トウモロコシ栽培：新大陸（メキシコ高原）起源の作物。アンデスのジャガイモ等とともに旧大陸（ヨーロッパ）へ伝えられた。

マヤ文明



ユカタン半島にあるピラミッド(左)とグアテマラの遺跡(中)と同ピラミッド(右)

ユカタン半島チチェンイツアの遺跡

16世紀、旧大陸のスペイン人によって征服されるまで、新大陸のラテン・アメリカに栄えていた代表的な文明は、マヤ文明とインカ文明だった。

前者は現在のメキシコのユカタン半島とグアテマラに、後者はペルー、ボリビアを中心とした一帯に見られる。どちらもその民族の末裔が今もこの地に生活し当時の面影を映し出している。

まず、マヤ文明といえ、今から3千年前に発生したといわれるが、独特な神聖文字、1年を365.2420日と算定した進歩した暦、すでにゼロの概念を知り数字を持っていたことなどがその特色として挙げられている。

ユカタン半島はチチェンイツアの遺跡。亜熱帯性気候のため草木の成長もひときわ早く、遺跡群はそんなジャングルの中に点在していた。高さ30メートルとティオティワカンのそれに比べたらかなり低いピラミッド、広い球技場、戦士の宮殿跡などが往時を語りかけてくる。

マヤ文明は一口に言ってトウモロコシ文明ということが出来る。トウモロコシが古代都市を支え、人々はその豊作を雨の神チャックに祈った。そのために必要となった精密な暦

。雨季の前には斧や棒でジャングルを切り開き、焼いた。そのあとに杖の先で穴を掘り種をまいた。いわゆる焼畑耕作である。そして調理には石臼や石斧が利用された。

遺跡の一角には「聖なる井戸」と呼ばれる深く陥没した地下水の沼がある。直径50メートルほどで、水面まで10メートル以上もある円形の淵からこわごわ覗く沼の水はモスグリーン色で、神秘さと悪魔性さえたたえていた。

伝説によると、干ばつの年、処女たちが人身御供として高価な宝物と一緒に沼に投げ込まれたという。雨神チャックをなだめて雨を降らせるために、雨神と形式上結婚させられ、生贄(いけにえ)に供されたというのである。

それは19世紀末、アメリカ人のエドワード・トンブソンが潜水服をつけ、泥が堆積している水底にもぐったところ、人骨にまじって種々の金製品や高価な装飾品の類が発見されたことで証明された。先のティオティワカン文明といい、ここにも当時の生命観、宗教観

が映り出ている。

グアテマラ - - 今もほぼ半数がマヤ系インディオ

さて、ユカタン半島から南西にたどっていくとグアテマラのマヤ遺跡に通ずる。遺跡の数からいえば、むしろグアテマラのほうが多く、分類的にも「古典期」として、いわゆる「後古典期」にあたるユカタン半島のそれより歴史も古い。

ここには祖先からの口承で伝えられた「ポポル・ブー」という叙事詩がある。内容は祖先の出現や当時の宗教観・宇宙観に触れており、日本の古事記のようなもので、きわめて文学的だ。

しかも、グアテマラは今も人口のほぼ半数がマヤ系のインディオで、首都から少し奥に入れば、当時のマヤ人の生活をそのまま目にすることができる。庭にすわってじっと布を織る女性をつむぐ糸に、数千年の昔がしのばれてくる思いだ。

首都グアテマラ市の繁華街のきれいなショーウィンドーの横で露店を開き、整ったハイウエーを裸足で、頭の上に山のような荷物を載せて歩いているインディオも目に付いた。スペインに征服・破壊されたマヤ文明が、今度は現代文明との接触のなかで、どのような変遷をとげていくかは大きな研究対象である。

インカ文明



幻の空中都市マチュピチュ

胸を突くような急傾斜の山肌を、小型バスで登り、岩だらけの山の斜面を5分も歩いた私は、突然眼前に広がった視界に「アッ」と驚きの声をあげてしまった。

「なんという荘厳な遺跡！ しかもこんな高い山の頂に！」

アンデス山中に眠るインカ文明の遺跡マチュピチュ

それはまさに“幻の空中都市”の名にふさわしい光景だった。

山の中腹から山頂にかけて段々畑にも似た石造りの市街地の跡が続いている。王宮や寺院だったらしき跡もある。向

こう側にそびえる山の頂にも神殿らしい遺跡が、山を覆う雲と霧の中で見え隠れしている。眼下には、アマゾン川の源流の一つウルバンバ川が千尋（せんじん）の峡谷をつくり、その川音が岸壁をよじのぼってきて耳に響く。

雲霧行き交うこの山の頂上に、いったい何の目的で、どのようにこの石造都市を築いたのであろうか。インカ文明研究の歴史学者のみならず、一旅行者にとっても、マチュピチュほど不思議で魅力ある遺跡はないだろう。

前日はインカ帝国の古都クスコを訪れていた。標高3400メートル。吹き抜ける風は肌を刺すように冷たい。私は、露店を広げているインディオからあわててリヤマ（ ）の毛のセーターを買い求めた。高地のため呼吸も乱れがちだ。「高山病の予防に」と勧められてマ

テの葉の茶を飲む。街にはインカ時代の古い石畳がそのまま残っており、近辺にはサクサマワンの巨石の遺跡を初め、インカ文明の名残りに事欠かない。そしてその決定版ともいべきものがこのマチュピチュの遺跡なのである。

クスコからマチュピチュへは高山鉄道が続いている。列車はアンデスの山中をゆっくりと、また何回もスイッチバック（ ）を繰り返しながら進んでいく。途中で数回“駅”に停まった。駅といってもプラットホームがあるわけではない。レールの地面そのものが駅なのである。そこには山高帽をかぶり、大きな風呂敷包みを背にしたインディオたちが、リヤマの毛の織物や民芸品、焼きトウモロコシなどを売っていた。

4時間ほどで終着駅へ。ここから小型バスで、高さ500メートル以上はあるであろう傾斜の山の断崖を、日光の「いろは坂」方式で上りつめたのである。

スペインの征服者ピサロが用いた奇策

1531年、スペインの征服者ピサロが165人の部下を連れてクスコにやってきたとき、中央アンデス地帯を支配していたインカ帝国の**アタワルパ王**の下には、約1万の兵がいた。兵の絶対数ではとてもかなうものではない。ピサロはそこで奇策をめぐらす。平和交渉をしてみると見せかけて、まんまと王を虜(とりこ)にしたのである。



ピラミッド型の指揮系統にあったインカ帝国は、**段々畑に似た石造りの市街地の跡**王を失うとたちまち崩壊した。一方、インカ兵にとって、スペイン兵の用いる鉄砲と騎馬は大変な脅威であった。それまで見たこともなかった馬は“四足の怪物”くらいに思えたことであろう。

こうして栄光を誇っていたインカ文明も歴史の舞台から消えてしまった。そしてマチュピチュの廃墟は、1912年、アメリカの考古学者ハイラム・ビンガムが乙女蒸発の伝説に惹かれて調査、発見するまで400年近くもアンデスの山中深く眠っていたのであった。

ところで「インカ」とは本来、部族につけた名称で、彼らを**インカ族**とよんでいたが、やがて「皇帝」も意味するようになった。インカ文明は15世紀の半ば、インカが中央アンデスにあった諸王国を征服して統一王朝となっからいっそうその繁栄をみた。そしてマチュピチュは、首都クスコ防衛のための大城塞であったのかもしれない。

だが、スペイン人の侵入とともに、インディオたちはその文化もとともに抹殺されてしまった。古い寺院の地下室には、今でも虐殺されたインディオの骸骨がうずたかく積み重ねられている。

今、大きな風呂敷包みを背負い街を歩いているインカの末裔たちもいるが、現代文明から取り残された彼等の行く末が気にかかる。あのインカ帝国を築いたたくましいエネルギーを未来へつなげて欲しいと・・・。

かくも見事な幻の空中都市マチュピチュの廃墟に立つと、とめどもない歴史への感慨が胸を去来するのは私だけではないだろう。

リヤマ：長い耳を持った南アメリカ産の反芻（はんすう）動物。「ラマ」とも呼ばれる。体毛はふつう白色で、黒と褐色の斑点がある。

スウィッチバック：列車が急な斜面を、前後の向きを変えながらZ字形に上る（下がる）こと。

マヤ文明、インカ文明の特徴について調べ、なぜそれらが滅びていったのかを考えてみよう。現代世界ではどんな位置づけにあるのだろうか。

ガラパゴス諸島（エクアドル）

進化論の島 恐竜時代が目の前に

東太平洋の赤道直下、エクアドルの海岸より約 1000 キロにある**ガラパゴス諸島**。同国属領の火山群島で、大小 9 の島と多数の岩礁とからなる。総面積 7844 平方キロ。人口約 2 万人。生物に固有種が多く、各島の特徴が著しいことはビーグル号の探検(1835 年)で明らかにされている。ガラパゴスの名前はスペイン語の「亀」からきている。



エクアドルの首都キトから飛行機で西に飛び、同島に降り立った。海拔 2800 メートルから一気に海拔ゼロに。同じ赤道直下なのに、涼しかったキトと比べ、ギラギラと照りつける太陽は容赦なく肌を焼く。

いくつかの島を船で回る。なんという過酷な自然の景観かと私は思った。そこには人工のものは何もない。サボテンが点生する乾ききった溶岩の砂場は、まさに**地球の創世記の姿**をしのばせる。島の海岸で奇声を上げるアザラシの群れ。恐竜時代の面影を残すイグアナ(トカゲ)。近寄っても逃げない、色彩も鮮やかな野鳥……。確かにここは、自然が、そして歴史がすべてを支配している。

このガラパゴス諸島に上陸したイギリスの生物学者**チャールス・ダーウィン**は、同じ種の動物が島々によって異なるのに気づき「**進化論**」を唱えた。爬虫類ほか地球上では、今ここしか生息していないという生物も多い。ユネスコは 1979 年、ここを「世界の財宝」と指定した。島を訪れる旅行者にも「自然保持」への厳しい規定が適用されている。

ダーウィン研究所にいる**ゾウガメ**を見た。5 匹ほどが並びゆっくり歩いている。甲羅の直径は 2 メートルに近く、年齢は百歳をはるかに超えていると思われる。その足もとを小さ

な陸イグアナが駆け抜けていった。

地球の創世と人類の誕生、動物の進化、そして永遠の生命観から見た宇宙の存在と人間生命との関連性進化論は興味尽きない。

次々と眼前に映る景観と動物に、やや興奮気味でカメラのシャッターを押し続ける私の手はじっとり。額には玉の汗が浮かんでいる。巻き終えたフィルムも入れ替えねばならない。



体長 2m 余りあるゾウガメ

一瞬の涼を求め、5m ほどの背丈のサボテンの陰に腰を下ろそうとした私は「ウヒャーッ」と声をあげて飛び退いた。シッポを踏まれた体調 50cm ほどのイグアナが、モゾモゾと顔を持ち上げ、うらめしそうに私をにらみすえたからである。

赤道をまたいでみると・・・

地球の南北両半球を同時に踏む！

ひよんな質問からはじめよう。地球儀または世界地図の「赤道」から何が想像されるか

。「地心を通って自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」「地球上の最も暑い点のつながり」「地球上に引かれている赤い線」・・・。

1、2 番は一応、正鵠(せいこく)を得ているといえようか。だが、3 番は異論が出てきて、さらに 4 番ともなると論外である。

エクアドルに滞在中、私はその赤道標なるものを訪れる機会に恵まれた。首都キト市の郊外へ車で小 1 時間。荒涼たる禿山のふもとやや広い台地に、基台の各辺が約 8m、高さ 15m ほどの、先端に向かってやや細くなっていく四角柱が立っていた。その上に直径 3m ほどの地球儀がのっかっている。



四角柱の各面には、それぞれ [E] [O] [S] [N] との文字が刻まれている。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字である。[E] [O] 面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅 5 cm ほどの 1 本の線が東西に伸びていた。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道”なのだ。

だが冗談ながら、色は何もついていなかった。地面の汚れと土ぼこりでそれは黒色に近かった。私は先に友人から聞いていた指示を思い出し、その線を二本足でまたぐと携行のカメラを同行の友に渡しポーズをとった。

斜め正面が [S] (南)

友は破顔一笑。「セニョール・シミズ、とうとう地球をまたぎましたネ。」

この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだという。たいそうなユー

モアだが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白い。これも冗談ながら、またいだ両足も股も、熱さでヤケドをするようなことはなかった。

周囲の気温は熱暑とは程遠く、摂氏 10 度前後で肌寒いほど。キトが海拔 2800m の高地にあるからである。ところで、**国名の「エクアドル」**とは、実はスペイン語で「赤道」の意なのである。

赤道が通っている世界の各地の気候またその人間の生活の状況を調べてみよう。

親日の土壌 ㊦

軍艦などで世話になった歴史的経過

チリの首都サンチアゴ市内でタクシーを拾い、後座席に乗り込むと急いでドアを閉めた。吹き抜ける風はことのほか冷たい。街路樹の端々に散り残った枯れ葉が揺れている。

7月。ここサンチアゴはブドウの採れる地中海性気候のもとにある。本来は温暖な気候なのだが、南半球全体が冬の最中にあることから影響は免れないのだろう。

ホッとして冷たくなった手をこすりつつ座席でくつろぐ私に運転手が語りかけてきた。

「セニョール（だんなさん）はハポン（日本）からかネ」

「ああ、生まれは日本だけど、今は仕事でパナマに住んでいるヨ」

私が日本人とわかると、運転手の相好はさらに崩れてきた。

「グシケン（ ）というのは強かったネ。日清戦争の頃のニッポンみたいなもんだ！」

突然の運転手の語りかけと、話の内容に飛躍が大きすぎてとっさに返答を切り出しかねている私に、彼は逐次、説明を加えていった。

チリ 日清戦争の際、エスメラルダ号を

近代の通信網の発達、地球の反対側にあるチリまでニュース伝送を可能にした。そのニュースが、チリ出身の挑戦者を退けたグシケンの勝利を伝えたというのである。一方、日清戦争とは、当時、日本がチリの好意で**軍艦エスメラルダ号**を買収したことを指していた。

1894年、**清国との戦争**（1894～1895年）が始まったとき、日本の海軍力はきわめて劣勢だった。何とかして海軍力を増強しようとして世界を探し回ったあげく、白羽の矢が立ったのがチリの巡洋艦「エスメラルダ」だった。

ところが、チリは国際法上「中立」の立場から直接、日本には譲渡できない。そこで同艦は一度エクアドルに譲られた形をとって同国のガラパゴス島に廻航され、チリの国旗からエクアドルの国旗に、更にそれが日の丸に取り換えられてから日本へ回船されたのである。

運転手の年齢からすれば、彼の祖父がまだ若かった頃の出来事であろう。でも、今から1世紀以上も前のことをまだ縁にして、親日の情を示してくる運転手に、私は何かほのぼ

のとしたものを感じたのであった。



チリとアルゼンチンの間のアンデスの峰

あれからほぼ1世紀。立場は逆転。今度は“メイド・イン・ジャパン”が世界各国そしてラテン・アメリカにも進出している。こうしたなか、一部の日本人の間では、自らの国の経済的な豊かさにおごり、かつての歴史を忘れかけているむきがないでもない。こちらの人たちは今、日本の経済発展を羨望の目で眺めている。そのなか、1世紀近くも前の祖父の時代のことを今に、親日的な態度で接してくれる運転手や市民の姿に、では日本人のそれはどうであろうかと思ひめぐらせてみたのだった。

グシケン：具志堅用高。昭和51年WBA世界Jr.フライ級王座につき、以後13度防衛と、日本歴代の世界チャンピオンの中でも、最多の連続防衛記録を持つ。

親日の土壌 ㊦

新見豊前守や支倉常長一行も大陸を踏む

新見豊前守を正使とする徳川幕府の使節団が、日米修好通商条約の批准交換のため、1860年に世界最初の大陸横断鉄道でパナマ地峡を渡った。更にその200年も前に、ラテン・アメリカを横断した使節団があった。

藩主伊達政宗の意を受け、支倉常長はローマ法王に謁見(えっけん)のため、150人の随員とともにイタリアに向かった。船は1613年10月28日、宮城県牡鹿郡の月浦を出帆した。

当時、先に九州の藩主がやはり遣欧使節を出していたが、それはマカオ、マラッカ、インド洋を経由しアフリカ南端の喜望峯周りという「西」への航海であった。支倉は太平洋を一路「東」に向かった。

むろん、まだパナマ運河も大陸横断鉄道もできていない時代である。船は約3ヶ月の航海の後、メキシコの太平洋岸の港町アカプルコへ入港した。一行はラッパと太鼓に迎えられ、闘牛ショーをもって歓待されたという。

随員の大部分はメキシコに残り、支倉がローマから帰ってくるのを待つことになった。支倉はプエブラを通り大西洋岸の港町ベラクルスから、1614年6月10日、再び海路をキ

キューバのハバナ経由でスペイン、イタリアへ向かった。

ところが彼がヨーロッパに2年滞在の後、1617年に帰国のためアカプルコに戻ってみると、なかには混血児を抱きながら出迎える者もいた。一方、「銀の国」メキシコの銀の採掘と製錬技術は、当時、世界一の水準にあった。そのため、日本からは多くの鉱山技術者が使節団に同行したともいわれる。

支倉の一行が戻ってまもなく、日本は鎖国時代に入った。そして長い夢から覚めて開国したものの、諸外国と結んだ不平等条約のため、日本はその後ずっと苦しむことになった。このとき平等条約を締結したのがメキシコであった。

しかもその後、第二次大戦の敗戦から3年たったばかりで、日本がまだ復興への歩みが固まりかけたばかりのとき、1948年の国連総会で対日早期平和条約を提唱したのもメキシコであった。最も近年では、2004年にメキシコとのFTA（Free Trade Agreement=自由貿易協定）に最終合意した。日本のFTAは2002年に発効したシンガポールに次ぎ2カ国目。農産物を含むFTAは初めてである。

こうして全体的に親日的なラテン・アメリカのなかでも特に親日的なメキシコとの日墨関係の歴史が刻まれていったのである。

にもかかわらず、遠いが故にか、はたまた地球の反対側にあるが故にか、欧米（この場合の「米」はアメリカ合衆国、カナダのアングロ・アメリカを指す）に向けた日本人の目はなかなかラテン・アメリカには向こうとしない。「移住の大地」「食料や原材料の供給先」そして「日本製品の販売マーケット」という主に経済的な面からの関心が、ラテン・アメリカに対する日本人の最大公約数的イメージかもしれない。

世界はボーダーレス時代へ

こうした状況下、ラテン・アメリカの人々の生活、文化、考え方を日本に紹介することは、お互いの理解を更に深めていくものであるとの見地から、訪れた先々で目に映った事象の断面をつづってきた。

それは、違った文化のなかで生活するときに起こるふとしたショックであり、異文化との衝突のかすかな摩擦音でもあった。

更にそこでわかったことは、文化の比較対比が、結果的に「日本文化論」また「日本人論」へと通じていたことである。

海外にいと、自分を含めた日本人の持つ善悪両面がいや応なく周囲と対比されて映り出てくる。その意味で「ラテン・アメリカからのメッセージ」は「海外で日本および日本人を考える」との一面も持ち合わせているかもしれない。

情報化の時代、地球上のほぼすべての地域の出来事が、同時進行で世界に伝えられる。メディアを通じた個人の力で、国の理解が進んだり、品位が上がっていったりすることもある。2004年、映画「冬のソナタ」で一躍日本人の心を捉えた韓国のペ・ヨンジュン、大リーグで活躍したイチローや松井が、それぞれの国のイメージアップや友好に貢献している

のも、これまでは考えられなかった進展である。

世界はボーダーレス（国境のない）時代に入りつつあり、政治と経済から更に文化と人間の交流が求められる時代に入っている。日本とラテン・アメリカとの関係も今後、更に緊密さを増していくことは間違いない。本報告がその相互理解の一助となれば筆者の喜びこの上ない。

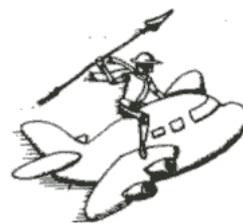
歴史上、政治、経済また文化面で世話になった国、また戦争等で迷惑をかけてきた国に、現在、日本人はどんな気持ちで対応しているだろうか。現状に問題点があるとしたら、どう改善していくべきだろうか、皆で話し合ってみよう。

第 部 文化の原点スペインを訪ねて

なぜスペインへ？

高校時代からの夢を実現

ラテン・アメリカを訪ねていて感じたこと、それは、これらの地の文化の原点はすべてスペインである、ということだった。以来、いつかはスペインに行き、その原点を探りたい、特にその文学の原点ともいべき「ドン・キホーテ」を究めてみたい、との夢を抱いていた。



2001年、定年を迎えた私は、いよいよ夢の実現に向けて踏み出した。今回は「社命」ではなく「自らの意志」による海外である。10数年前、年金生活者が海外で生活できるようにと、当時の通産省が「シルバー・コロンビア計画」を打ち出した。その候補地の一つであったスペインの地中海岸コスタ・デル・ソル(太陽海岸)に住み、マラガ大学に留学することにしたのだった。

もう40年以上も前、私の高校時代には、留学なんて夢のまた夢、都会の超優秀生がフルブライト奨学金を利用した留学ができる、といった話を聞いたのみだった。アメリカの家では水道口からお湯がでる、ロサンゼルスにはハイウェイがある、といった社会科の教科書に写真入りで出てくる生活も、全く別世界での出来事だった。

1ドル360円()。それも自由に外貨が手に入らない時代であった。あれから日本と世界の環境は変わり、今は1ドル110円前後(2004年)。“国際化”の波に乗って、誰でも海外に行ける時代だ。日本経済の高度成長の中で、モータリゼーションに働いてきた皆さんの親たちがその力になってきたのである。

留学　こんなよいものは若者だけに限らない。これまで家族を支えるために必死で働いてきた父親族も、少し人生を振り返る余裕のできた定年後に、若い時代にできなかった夢を実現しようと考えても、責められる理由はないだろう。

思えば、私自身、多感な高校時代には不測にも母校(長野県立伊那北高校)が火災で焼失してしまった。不備な仮校舎での授業と、受験準備のために、クラブ活動も十分にできなかった。母が病気で倒れ入院、楽器を買えるような家計でもなかった。今、その青春時代を再現しようと、第二の人生を歩み始めたのだった。

現在は変動相場制だが、1971年まで固定相場制で1ドル360円だった。

Having より Being

今、定年後のロングステイ(海外長期滞在)が静かなブームになっている。そこで大切なのは、海外でどういう生活をしていくかである。ただ楽しいだけでなく、そこに何かの目的、創造的なもの、または社会に貢献できるものがないと、人間の本当の満足はない。

その一例が「定年留学」といえるだろう。

人生は、**Having**より**Being**が大切だとも言われる。財産や貯金も大事だが、今、何をやっているか、やろうとしているかが問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題なのである。

クラーク博士の“**Boys be ambitious!**「少年よ大志を抱け」”の言葉はまた“**Seniors be ambitious!**「熟年よ大志を抱け」”にも通ずる。

私自身、スペイン語については、34歳の時、全く初歩からの挑戦だった。また英語は高校、大学と人並みの勉強をしていたが、これも本格的に取り組み始めたのは、必要性が生じた50歳を過ぎてからであった。“やる気さえあれば必ず開けてくる”というのが、体験からくる実感である。ましてや、頭脳の柔らかい、若い皆さんをや!

以下は、マラガ大学での学校生活を綴ったものである。後半部分はスペイン各地を訪ねた時のレポートと、文化事情の紹介である。将来、留学する予定の人への参考のみならず、すべての皆さんへのなんらかの啓発のきっかけになっていければと願っている。

マラガ大学での学生生活

多彩な民族、国籍、年齢が集う

マラガ大学。正式には Universidad de Málaga, Cursos de Español para Extranjeros(マラガ大学付属外国人向けスペイン語コース)。南スペインの地中海岸にあるマラガ市の RENFE (国有鉄道) マラガセントロ駅から、幅15メートル以上もある歩道を歩いて約10分。校舎は地階と高天井の2階建てで、10~20人用の教室と大教室が計20ほどある。

月曜日から金曜日まで1日4時間の集中授業。授業料は各コース3ヶ月で約300ユーロ(1ユーロ約120円<2002年>)。各学部のあるメインキャンパスはマラガ市のやや郊外にある。



校舎の入口と学生たち

2002年5月に渡西、6月初め事務室で受付をすませると、まずクラス分けの筆記試験を受けることになった。約100人。見たところ、ヨーロッパのほとんどの国とアメリカ、そしてアジアからも少し。試験は文法を中心とした60題の質問。続いて別室で1人ずつ会話の面接試験。自己紹介から始まり、なぜスペインに来たのか、マラガが好きか、

昨日したことを簡単に述べよ、といった内容だった。

翌日。校舎の玄関にクラス別の名簿が掲示された。6つのレベルに分けられ、自分は「中級の上」に名前があった。

指定の教室に入る。クラス仲間は全部で13人。まず、それぞれが自己紹介をした。

トーマス ハーバード大学に学ぶニューヨークからの大学院生。フランス、スペインの歴史を勉強、Ph.D(博士号)に挑戦中という。

- アンソニー アメリカのマイアミ生まれ。武術、柔術に関心がある。父親はキューバ人。教室でも帽子をかぶったまま。
- アナ スイスから。ずいぶん背が高く、180センチくらいはありそう。明るい行動派。
- サラ スイスから。幼稚園の教諭。彼女は小柄でキュート。ドイツ語、フランス語、英語ができる。
- ヘレン イギリスのサザンプトンから。大学生。このマラガ大学内に恋人がいるという。
- ファン 中国系アメリカ人。現在はアメリカの大学でアメリカ文学（詩）を教えているという。40歳くらいか。あごひげも生やし、かなり活発な発言をする。
- カロリーナ スウェーデンから。母親はチリ人。両耳のピアスのほかに、鼻の先にも小さな金色の飾りを付けている。
- カリメラ ギリシャから。いかにもギリシャ美人のタイプ。彫りの深い顔に豊かな胸。しかもタンクトップで教室に来たのは驚いた。

それに日本からのY君、K君、Cさん、Yさん。それぞれ日本の大学から在学留学の人、一度就職したがやめてきた人等、異なった背景を持っている。

そして、私、タケシ。

担当教師をファーストネームで呼ぶ

教室ではすべてファーストネームで呼び合う。教師もクラスメ
教室内でのリラックスした授業風景



ートもみんな私のことを「タケシ」と呼ぶ。教師に対し、私たち生徒も「ラウラ」（文法担当）、「ラファエル」（会話担当）とファーストネームで呼ぶ。

200人近くの生徒がいる学校全体で日本人は6人。そのうちの5人が同じクラスに分けられたのは、ほぼ同じレベルにあるとはいえ、偶然だった。そこで、できるだけ日本人だけで固まらないように気をつけることとする。教師も「ここでは、休み時間でも一切、母国語を使うな！」と厳命している。

最初の2時間は文法の授業。ラウラは30代と思われる女性教師。目が大きく髪はカールしている。テキストのコピーを配り、生徒にやらせてどんどん誤りを指摘していく。

会話のラファエルは、50歳前後の細身の男性で、機関銃のようにしゃべりまくる。生徒の出身国の文化や習慣を、挑発するかのように容赦なく批判し、生徒の発言を引き出そうとする。強引な面もあるがなかなか面白い。

クラスでは、だれもが積極的に自分の意見を表明している。それに比べると、自分を含め我が同胞は、発言ぶりが少々物足りない。スペイン語の理解度そのものからくる要因もあろうが、日本の初等・中等教育の環境からきている要因も大きいのではないか。

ビクティマ（犠牲者）を名乗り出る

7月の授業の初日の火曜日。会話担当の教師ローラが皆に問いかけた。(月毎にクラス仲間も担当教師も変わることがある)

「これから毎週金曜日は、あなた達の中の代表が何かについて発表し、それについてディスカッションをする、という形で進めることにします。ついでには最初の登壇者、ビクティマは誰になるかな？」

「**ビクティマ**」とはスペイン語で「**犠牲者**」の意。テーマを用意し、発表し、皆の質問や意見に対応する労苦をおもんばかってそう言ったのだろう。

教室は急にシーンとなってしまった。ローラと目を合わさないように、皆何となく下を向いている。

「ハイ、勇気あるビクティマは？」

再びローラが問いかけてもシーン。無理もないかもしれない。スペイン語についてまだ自信もないところに加え、3日間という短期間に、テーマを選び準備するだけでも大変だからだ。

いつまで待ってもらちがあきそうにもない。そこで、私は思いきって名乗り出ることにした。

「OK、じゃあ私がビクティマになって、トップバッターを引き受けましょう」

これまでにすでに1ヶ月の教室経験があることと、かつて中南米にいたときの体験を合わせれば、なんとかなるだろうとの楽観と、クラスで最高齢であることが、なんとなく義務感みたいなものを感じさせたからでもある。

「年齢的には、自分の息子や娘みたいな生徒仲間を、ローラの攻めから守ってあげなくてはいけない」と、妙な“人生の先輩”意識が出ていたとも言える。

皆はホッとしたようだった。続いて、「じゃあ、その次は自分が」とアルジェリアからのサミエルが名乗りを上げた。こちらの勢いに引っ張られたのかもしれない。

さて、テーマを何にするか。私は、以前にローラが「**日本からの学生は、なぜか教室でもあまり発言しようとしな**い」と言うのを聞いていた。おしなべてどの教師もそのように言う。そこで、なぜそうなのか、その背景に触れ、少しは反論できるようなテーマに決めた。

「**スペインと日本の文化・習慣の違いについて**」。内容は、スペインに来てからこれまでに体験、見てきたことを中心に感想を述べ、日本との対比、背景について語るものである。大きく3本の柱を立てた。

1. 時間に対する感覚の違い
2. しぐさの違い
3. 言葉の構成の違いと「謙譲」の文化について

私の研究発表

スペインもラテン・アメリカも「時間に対する感覚」では共通している。そこで、「1」では、スペインでの体験を述べながら、第1部の「五つの『あ』の原則」を紹介、さらに日本の交通機関の時刻の正確さに触れ、考え方、文化の違いに言及した。「2」の「しぐさの違い」でも、第1部の内容をスペインに合わせて解説した。

以下は、「3」の部分の発表原稿の一部である。これをできるだけ見ないで、ジェスチャー豊かに話さなければいけない。(以下は発表したスペイン語原稿から訳した日本語原稿である。その際、教室では触れなかったことで大事なことは<>で書き加えた)

さて、皆さんも体験しているようにスペイン語はなかなか難しい。特に動詞の変化が難しいですね。でも、発音となると、日本人にとってスペイン語は、ほかの言語、たとえば英語などよりも易しいです。もちろん、[L]と[R]または[F]と[J]の発音の区別などは大変に難しい。でも、よいことは「アエイオウ」の母音が非常に似ているということです。

その一方で、日本語はマスターするのに大変に難しい言語だと思います。相当な努力をすれば、外国人でも日本語を話すことができるようになるでしょう。でも、読んだり、書いたりする段になると、それはそれは難しくなるのです。

日本語の文字には3種類あります。ひらがな、カタカナ、漢字です。(ここで黒板に、文字例を書き出して説明)。ひらがな、カタカナともに48字ですが、漢字となると、ふつうに社会生活をするために知っておく文字は2000字近くになります。これらの文字を記憶するのは、大変な努力と時間を要します。

ここから今日のテーマに関係してきます。つまり、何かを言ったり、書いたりするときには、話し相手や状況に最も合う言葉を探さなければならない、ということなのです。というのも、日本の社会では、へりくだった謙譲の表現が要求されるからです。

謙譲の意を表す言葉のほか、尊敬の意を表す言葉もあります。そこで状況に最も合った言葉を選ばなければいけないのです。ここに日本人の、また日本社会のメンタリティーの一部が現れています。

たとえば、自分自身を表現するのにも、10近くの言い方があります。(黒板に日本語とローマ字読みを書く)

私(わたくし)、私(わたし)、僕、俺、我、内(うち)、手前、小生、等々。「わたくし」はより丁寧で上質の表現です。「わたし」は比較的丁寧な表現で、最も一般的に使われてい

ます。「僕」「俺」「我」とも男性が使用。このうち「僕」はより口語的で、「俺」はやや丁寧さを欠き、「我」はやや古い表現です。「内」は両性によって使われます。「手前」もへりくだった古い表現。「小生」は主に手紙や書き物の中で、やはり、へりくだった表現として使われます。

繰り返しますが、日本の社会で大切なのは「謙譲」の心なのです。これをわきまえないと、まわりから「あいつは傲慢だ。頭が高い」と言われかねないのです。これは、先ほど述べたジェスチャーにもつながるものです。

スペイン語では、自分を表現する言葉は「Yo」の一つだけですよね。英語でも同じ「I」だけですね？ もちろん、動詞の使い方によって、丁寧の度合いを変えていくのもお互いに勉強しました。でも、日本語の丁寧語、謙譲語ほどの複雑さではないと思います。

昨日、それぞれの国民性の長所、短所についてディスカッションしたとき、ローラが「日本人はなかなか発言しようとしなさい」と言いました。それは、基本的には日本の教育システム 教師の講義を一方的に聴くだけで、そこで自分の意見を述べ、討論をし合うということが少ない から来るものですが、また、自分たちのスペイン語が、意見を自由に表明できるまでに至っていないから、という面もあります。

しかしもう一方で、日本人が、もともと自分をあえて表に出そうとしなさい「謙譲」の心があるからです。これで、その背景が、少しわかっていただけるといいんですが……。

(この部分、難しかったのか、こちらの説明が悪かったのか、私のスペイン語がわからないのか、あまり反応はない。そこで最後に、日本人と各国の国民性について語るジョークを紹介した。第1部にあった小話である。それぞれ日本人が、自分だけ突出することを嫌い、周囲の人々にならって行動を起こす傾向性を揶揄したものである。日本人とつきあって思い当たるところがあるのか、これはおおいに受けた)

締めくくりは、聖書に次いで世界で翻訳されているという「ドン・キホーテ」の言葉の紹介だった。

私はドン・キホーテの言葉が大好きです。その一つにこういうものがあります。日本のミュージカル「ラ・マンチャの男」でドン・キホーテが語っています。私はこの言葉を名刺の裏に印刷しています。

「理想と正義に向かって突進するオレのことを、みんなはおかしいと言う。でも、やりたいことがあるのに、世間の風評、体面なんかを気にして現実に妥協、やろうとしない彼らこそおかしいんじゃないのかね」

この言葉の後半部分は、日本人のメンタリティーをも表しています。

.....

まだまだ、比較したい項目はいっぱいあります。たとえば、「闘牛についてどう考えるか」

「サッカーへの興奮度」とか……。この一つひとつのテーマを論ずるだけでも1時間は必要でしょう。持ち時間も考えなければいけないので、私の話はこれで終わります。どうもありがとうございました。

(ローラも教室の仲間も大きな拍手を送ってくれた。やったという充実感と、ホッとした安心感が交錯した)

侃々諤々(かんかんがくがく)の意見が続出

ここで質問、討議に入った。まず、担当教師のローラがスペイン人の時間に対する感覚の緩さについて同調。「ほかにもいっぱいあるのよねえ」と。しぐさについては面白い発言が飛び出した。

突然、くしゃみが出そうになった。そのとき、どうするか? スペイン人は両手を口元にもっていく。もちろん、他人に飛ばないようにとの心遣いである。スウェーデンからの学生は「我々は、腕の肩に近い部分をすぐに口元に持って行くよ。だって、手は他人と握手をする。相手に対しても汚いではないか」と。

「ハクシヨン」という活字での表現も「アチス」とか、いろいろありそうだが、そこまで話は展開しなかった。ただ、くしゃみが出ると、たいがい、周りのだれかが「ヘスス(イエス・キリストの意)」とか「サルー(健康の意)」といった声をかける。「神のご加護を」とか「お大事に」という意味である。

抱擁とキスについては、そのやり方について、侃々諤々(かんかんがくがく)の意見が続出。「そういえば、男同士キスする国も結構あるじゃないか。よくテレビで政治家同士がやっているのを見るし……」

とどめの質問(というよりも、驚きの感嘆符)は「ええ! じゃあ、日本では親子の間でもキスをしないの?!」だった。

緊張しながらも、なかなか楽しい小1時間だった。

クラス仲間を我が家に招待

9月末、夏季コースの最終日。授業の終了後、大学近くのカフェテリアで茶話会を持った。このコースを最後に母国に帰る受講生が何人かいたからである。話題が日本食談義まで広がっているうちに、いつの間にか、みんなを我が家に招待、日本食を食べさせてあげる方向へと展開していった。

私にとって彼(女)らは、年齢的に自分の息子や娘のようなものである。わが娘も、かつてメキシコのグアナファト大学に留学したことがある。そのときに周囲のいろんな人に、何やかにやとお世話になったかもしれない。そう思えば、遠く母国を離れて学ぶ彼らに、若干でも激励になれば、恩返しというほどの大げさなものではないが、地球上のどこにあっても“お互いさま”じゃないかとの思いもあったからだった。

それに、実は私は、定年になってからすぐに、自宅近くのクッキングスクールに1年間

通っていた。その勉強の成果を発揮できるチャンス、なんて思いもあった。十八番となっている中華料理を2品、妻の協力もあって鳥のから揚げ等の洋食2品、それに、みんなが食べてみたい、と言っていた握りずしを用意した。幸いにスペインは良質なマグロを日本にも輸出している国だ。近くのスーパーですばらしいマグロのトロも手に入った。

美人女子大生とのキスと抱擁！

昼食時間はスペインタイムに合わせてある。午後2時。準備がほぼできたところヘアパートの玄関のベルが鳴った。私はあわてて、スリッパをやや厚底の靴に履き替えた。小柄な自分が、背の高い彼らに少しでも合わせようとの心と、靴で入ってくる彼らが遠慮しなくていいように、同じものを部屋で履いている必要があったからだ。

まもなく8人がぞろぞろと我が家に入ってきた。

「ムイ ビエンベニード！（ようこそ！）」

私はエプロンを脱いで、玄関に立ち、女性とは一人ひとり両頬にキスし、男性とは力強い握手で来宅を歓迎した。学校内では、恋人同士でもなければキスすることもあまりない。でも、スペインで学校を外れたとき、親しい間柄での最大の歓迎の意を表すのはやはりキスである。

キスといっても、唇ではなく、両頬を触れ合うだけのもの。これをしないと却って歓迎の意が弱く、堅苦しい雰囲気になるからである。

とはいえ、金髪の美人女子大生とのキスは、瞬間的でも心をときめかすものがある。妻も同じように全員と、しかも男子学生ともキスしているわけだから、こちらも問題ない。還暦を超えて、若い外国人女性と頬を触れ合わせられるのも、スペインという文化風土にいるからこそ、といえるのかもしれない。

「サルー！（カンパイ！）」

歓迎の乾杯をし、食事が始まると、テーブル上の料理はかなり早いペースで減っていく。ほとんどが一人住まいの独身生活。それに体も大きく若さにあふれている。少し多すぎかな、と思って作った皿も、どれも瞬く間にきれいに片付けられていった。



アパートのテラスでの楽しい語らい

アルコールが少々入ってくると、談笑も一段とにぎやかになっていく。話題はスペイン生活で苦労していること。母国での生活模様。つい先ごろの試験の結果等々。やがて、担任の先生の名前を挙げ、教え方の特徴から、教材、教授法まで感想を語り、批評を始めた。どこの国にあっても、校外での生徒の教師批評は同じようだ。

ギター演奏、歓談と、かくして我が家で

の初の会食会は終わった。

「ペスカード・クルード（生の魚の料理）を初めて食べたが結構いけるね」

「中華もレストランのものと違っておいしかった」

「タケシがこんなに料理ができるとは知らなかった」

「ギターも弾くし・・・」

お世辞も含んだ感想かもしれない。でも仮にお世辞でもみんなが喜んでくれて元気になればそれでよい。玄関を出て行く彼らを、再びのキスと握手で見送りながら、私の心の中には、ふと全員の親代わりのような感情さえもこみ上げてきたのだった。

「またいつか、機会を見て呼んであげることになるかもしれないなあ・・・」

“我がドン・キホーテ”を語る

「スペイン文学」のクラスでは、セルバンテスのドン・キホーテについても取り上げられた。担当教師のテレサは前日、私に声をかけてきた。

「タケシ、確かあなたはドン・キホーテに詳しいって言っていたわね。明日の授業でできる範囲でいいから研究発表をしてくれない？」

むろん、スペイン語による発表である。家に帰ると、私は急ぎょ、辞書を引き引き、自分なりの経験や知っていることをまとめた。

なぜ、私がドン・キホーテなのか？

それは、小学校の6年生までさかのぼる。学校の学芸会に、クラスで「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私がサンチョ・パンサの役を演じたのがきっかけだった。

以来、その奇想天外なストーリーに惹かれて、少年向けの本を、大人になってからは全訳本を通読したものだった。また10年ほど前、職場の近くにある日本スペイン協会で、週1回、夜、原書による勉強会があったとき、なんとか時間をやり繰りして出席した。さらに、松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」も東京で3回観劇した。かなりの凝り性だったともいえる。

ドン・キホーテもだが、サンチョ・パンサの言葉もいい。

「人間寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」(永田寛定訳)

「この世を捨て、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇もおんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも聖器番のからだも、よしんば背たけにちがいはあろうと、占める広さに変わりはないえ」(同訳)

.....

二人の間でやり取りされる諺は、実に示唆にも富んでいる。正義を求め、悪と戦うために槍をかかえ風車に突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化ともいえる。セルバンテスは58歳のとき前編を、68歳のときに



後編を出版した。亡くなったのは奇しくもシエイクスピアと同じ1616年だった。

作品は近代西洋文学の原点ともなり、聖書について世界で多くの言語に翻訳されているという。物語はわかりやすく面白い。しかしながら、それをどの程度深く理解できるかは、読者の成熟の度合いにかかっているのではないか。何回か本に目を通した自分自身の体験からして、そう言えると思う。

発表を終えると、クラス仲間からは拍手が起こった。「トーキョーのドン・キホーテ、いいじゃない!」。私は、これまでに勉強し積み重ねてきたものを、若干でも発表できたうれしさに、心の中ではやや興奮していた。テレサは私の話を総括しながら、更にさまざまな深い解説を加えていった。

(その後も、計5回ほどの研究発表をした。そのうち1回は、担当教師とクラス仲間の強い要請もあって「仏教」についての話をするこもあった)



マラガ大学の修了証書



スペイン料理「パエジャ」



ひまわりの続く大地



各地を訪ねて

留学では、クラスでの勉強のみならず、居住する町での人々との触れ合いや交流、また各地を訪ねることも学生生活をより充実させ、その幅も広げてくれる。学んでいる外国語の生きた実践の場ともなる。以下は、私が訪ねた各地で見、感じ、遭遇したエピソードの一端である。

マドリード

ブラド美術館 教科書でなじみの作品がいっぱい

マドリードを訪れる観光客が見逃せない一つがブラド美術館であろう。ブラドはパリのルーブル、ロシアのエルミタージュと並ぶ世界屈指の美術館の一つ。所蔵絵画は 8000 点。展示作品だけでも 3000 点を超えている。

エル・グレコ、ベラスケス、ゴヤに代表される 12～19 世紀のスペイン絵画のほか、王室の趣向を反映したイタリア派絵画、フランドル絵画、オランダ絵画、ドイツ絵画などもある。展示ホールは天井も高く開放感がある。

まずは、館内の広さと作品の多さに圧倒される。しかも、どれも大作で、日本の学校の教科書や美術関係の図書に紹介されている作品も多い。年間の訪問者は約 200 万人。日本からの訪問者の多いことに合わせて、日本語の案内書も置いてある。

歴史的な作品が、ガラスで覆われているのでもなく、手を伸ばせば届くところにある。驚いたのは、フラッシュなしの写真撮影が許可されていることである。日本の美術館は、作品の管理もはるかに厳重で、写真撮影も禁止されていることが多い。どこに行っても、カメラを肩にした日本人は多いが、ここでもかなり目立つ存在ではあった。

皆がお目当てにしているマハの絵は「裸」「着衣」とも第 1 回目の訪問時にはなかった。アメリカの美術館に貸し出し中とのことだった。2 回目ではじっくり鑑賞する。確かにあのおおらかな姿態は、どこまでも夢と想像を広げてくれる気がする。

セゴビア

ローマ水道橋 壮大な歴史遺産

マドリードのチャマルティン発の近郊電車でセゴビアへ。約 2 時間。北に向かう電車の窓には、南のアンダルシアとは違った、いわゆるヨーロッパ風の村や町並みが映ってくる。面積は日本の 1.3 倍の広大なスペインでは、地方の自然も文化も、歴史土壌も多様性を持っている。

セゴビアは、海拔約 1000 メートルの高地に位置する城壁に囲まれた街。15 世紀にはカスティーリャ王国の中心地として、重要な役割を担った。歴史的に重要な建築物が多く、特にローマ水道橋は、旧市街とともに世界遺産に登録されている。

ヨーロッパで最も原型に近い姿で保存されている水道橋。全長 728 メートル。地上から一番高いところは 28.9 メートルもある。現在、水は流れていないが、20 世紀半ばまでは近くの川から水を引いていたようだ。



全長 728m高さ 28.9m のローマ水道橋



圧倒的な重量感

セメントなどを一切使わず、切り出した花崗岩をたくみに積み上げていく方法で、紀元前1～2世紀にローマ人によって造られたと言われる。ローマ時代の建築物の中でも、芸術的にも技術的にも最も優れているものの一つとされる。

広場から橋を見上げる。圧倒的な重量感！基底部の橋桁となる柱の花崗岩は、どれも数トンから数十トンはある。アーチ型に伸びた橋を築く花崗岩も数百キロから数トンはあると思われる。こんな硬い重い石を、形を合わせるためにどのように切り、削り、組み合わせさせていったのか。橋のアーチ部分は、お互いの石の圧力で落下しないように力学的になっているのだろうが、どうやって持ち上げ、組み合わせたのか。どのくらいの水がこの橋の上を流れ、どのように使われていたのだろうかと、壮大な歴史遺産を前に、さまざまな感慨がわいてくる。

アルカサル 修学旅行の中学生たちと友情交歓

水道橋とはセゴビアの町を挟んで反対側にアルカサル(城)がある。外観が壮麗優雅で、ディズニー映画「白雪姫」の城のモデルにもなっている。

城の狭く暗い、らせん状の階段を上り、塔の上に行ってみた。広い展望台には、多くの観光客に混ざって、研修旅行の中学生たちがいて賑やかだった。スペインの地方からの生徒らしい。東洋人の我々が近づくと、興味津々で何人かが声をかけてきた。

「どこの国から来たの？」

「ハポン(日本)だよ。ハポンでどこにあるか知っているかい？」

「うん、ほら、ソニーとかトヨタとかある国じゃないの？」

「オレ、オレ、オレに言わせる。ほら、今サッカーをやっているじゃないか！ お隣のコレア(韓国)と一緒にさ」

(2002年、ちょうどサッカーのワールドカップが日本と韓国で開催されていた)

数人から数十人へと一挙に子供たちの輪は広がり、それぞれが自分の思うことを叫んでくる。目はキラキラと輝いて、にこりが無い。こちらもつい楽しくなって、子供たちとの話に乗っていく。

しばらく、やりとりが弾んだところで、「じゃあ、一緒に記念写真を撮ろうか」と声をかけると、男の子も女の子も、我先にと、私たちの周りに集まってきた。引率の教師も、にこにこ目細めながらその光景を見ている。

先に地上に下りた私たちに、展望台から手を振る彼ら。歴史の舞台で思わぬハプニング、ミニ友情交歓となった。



「白雪姫」の城のモデルにもなったア
カサルと搭の屋上で会った中学生たち

トレド

観光地ではとりわけ用心を！

マドリードのアトーチャ駅から、今度は約1時間半、近郊線で南に行くとトレドに着く。トレド駅は実に芸術的な作りになっている。構内の随所に美しいステンドグラスがはめ込まれ、壁はイスラムのモザイク模様。天井も高い。

スペインの代表的観光地として知られるこのトレドは、カスティーリャ・ラ・マンチャの中心地。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教の三つの文化が混在、1500年以上の古い歴史がある。奥州の伊達政宗に派遣された支倉常長の一行も、このトレドを通してマドリードに入城している。

トレド駅から街の中心に向かって歩いていった。目指す旧都は丘の上、タホ川を渡った側にある。妻と一緒に橋を渡っていると、向こうから1人の青年がやってきた。カメラを構え、自分が橋上のどこに立ったら丘の上の旧都をバックによい写真が撮れるか、場所を探しているようだった。そして、こちらが行き過ぎようとする、とっさに声をかけてきた。

「すみません、シャッターを押してくれませんか？」

観光地である。誰でも、どこでも写真を撮る。またそれに協力するのは当たり前、お互いさまであろう。

「OK」。私はこころよく引き受けた。そして彼の指示に従って、カメラを向けた。だが、バックがびたりと決まっていない。そこで私は「もう少し左に移動した方がバックがきれいに入りますよ」と声をかけた。彼は、少しの動きを見せたが「いい、いい、そのままでもいいから」と、特に気にする様子もなかった。

撮影したカメラを彼に戻し、再び目的地に向かおうとした。

と、突然、私たちの前に2人の男が現れて立ちふさがった。そして、ポケットから身分証明書のようなものをおもむろに取り出すと、少々の威厳を込めて言った。

「警察のものだけど、身分証明書、パスポートを見せてください」

スペイン警察の制服は着ていない。もしかしたら、私服の警官かもしれない。でもその瞬間、私にひらめきがあった。

「きっと、これは偽警官だ！」

妻もそれを察したらしく、「行きましょう、行きましょう。かまわずどんどん行きましょう」と、私の手を引っ張った。私たちは駆け足気味でその場を50メートルほど離れたところで、追いかけているかどうか気になり、後ろを振り向いた。すると、3人はその場でまだたたずんでいた。

間違いなく、これは強盗未遂だった。しかも、警察官に名を借りた！ 今思えば、あの写真のバックは何でもいいわけであり、まして、カメラにはフィルムさえ入っていなかったのではないか！

聞くところによれば、日本人のパスポートは高額な値段で取引されているという。そうした情報を事前に聞いていたので、外に出るときは、いつもパスポートのコピーだけを持ち歩くようにしていた。だから仮にやられても、その面の被害はなかったが、持ち金すべてを掠め取られたであろうことは間違いあるまい。運悪ければ、危害まで加えられて……。スペインに来て初めて遭遇しかけた危険ではあった。

大好きなスペインのイメージを崩さないために、こんな話には触れたくないが、どこの国でも、一部だが悪い人間がいるもので、特に観光地では気をつけなくてはいけない。これから海外を訪れる方への参



考のためにここに記した次第。タホ川の反対側にあるパラドールからの眺め

遠方から眺めてこそトレドの町

さて、トレドの本当の姿を知るためには、トレドの町を遠くに離れた高台から見なくては行けない。町の中を歩いているだけでは、多くの史跡に巡り会うことはできても、町の全体像まではつかめない。トレドはその全体像こそ、中世の面影と歴史的な威厳を語っているような気がする。

タクシーで再びタホ川を渡り、向かい側の高台にある国営ホテル・パラドールまで足をのばす。ホテルのレストラン兼展望台。ここから数キロ前下方に眺めるトレドは、まさに町全体が大きな要塞となっている。レンガ色の建物の町並みは、どこからでも絵になる。

展望台では、8人ほどの日本人がキャンバスと絵の具を広げ、トレドの町を描いていた。大部分が、主婦また自由業の人と思えた。ジュースやコーヒーをウェイターに注文しながら絵筆をふるっている。そう、今は、単なる観光旅行では飽き足らない。このような新しいスタイルの旅行も、一つの流れになっているのである。

ラ・マンチャ地方

我也また「ドン・キホーテ」の如くに・・・

ラ・マンチャ県のさる村、名は思いだしたくない村に、さほど前のことでもなく、槍かけに槍、古びた楯、ひよろひよろ馬にはしっこい狩犬をそろえた、型のごとき郷土が住んでいた。昼は羊肉よりも牛の勝った煮込み、たいていの晩は昼の残り肉へ玉ねぎなど刻みこんだサラダ、土曜日に塩豚の玉子あえ、金曜日にレンズ豆、日曜だと小鳩の一皿ぐらいそえて、それだけに収入の4分の3が消えた (セルバンテス作「ドン・キホーテ」 永田寛定訳 以下の引用も同じ)



どこまでも続くラ・マンチャの大平原

小説「ドン・キホーテ」の書き出しである。「正編」「続編」とあるこの長編小説では、すぐの一つの見せ場が登場する。

この時、あの大野には今もある粉挽場(こなひきば)の風車が3、40 あらわれた。ドン・キホーテは、それに目をとめるやいなや、従士に言った。

「天はわたしたちの仕事を、願ってもみられないほど上首尾に、運んでくださるぞ。それ、あそこをみなさい、サンチョ・パンサ。山のごとき巨人が30びき、いや、もちっとじゃろうな、立ち現れたではないか。かれらと一戦におよび、みなごろしにしてくれよう。そしてな、まずえた分捕物で、富貴の道を開こう。これは名のあるいくさじゃし、かゝる悪種族を地のおもてから刈り取るには、神へのりっぱな御奉公じゃ。」

「巨人がどこに」と、サンチョ・パンサがきいた。

「それ、あそこに見える長い腕のやつらじゃ」と、主人が答えた。

「中には、腕の長さ2里に達するのさえ珍しくないぞ。」

「おめえ様、待ってくんなせえ」と、サンチョ。

「あそこにめえるは巨人でねえ。粉挽場の風車ですがすよ。腕とめえるのがね、それ、風でまわって石臼を動かす、翅木（はねぎ）だあよ。」

.....



今もいくつかの風車が並び
野っばらをころがっていった

小説「ドン・キホーテ」のストーリーの中で、あまりにも有名なシーンである。本の内容全部を知らない人でも、これだけは知っている。

ラ・マンチャの大平原。数ある風車を悪の象徴の巨人と見たてた。ドン・キホーテはサンチョ・パンサの止めるのも聞かず、乗っているロシナンテに拍車をくれた。思い姫ドゥルシネアを一心に祈念しながら、一番手前の風車に槍をかかげ突いてかかった。

槍先が翅木にふれるよと見えた時、にわかにかき起こった風が恐ろしい勢いで翅木を回転させたから、槍はぶち折れるし、馬と旗手（のりて）はそっくりさらわれて、後方へぼんと棄てられ、さんざんな態たらくで、

ブドウ畑の広がる広大な赤土の大地。バスで遠方から見えていた風車の群に近づくと何台もの観光バス、自家用車が草原の駐車場に並んでいる。風車の一つは見学用として、中まで入り、翅木の付け根まで上り、風から得た力が挽き臼につながる様子を見られるようになっている。今は、風は吹いても翅木は動かないようになっているが、いかにもどこから、ドン・キホーテとサンチョ・パンサが出てきそうな情景ではある。

近くの町には、ドン・キホーテが騎士の称号を得るのに泊まった旅籠（はたご）、思い姫ドゥルシネアの住んでいたエル・トボソの家、さらに「ドン・キホーテ」の資料館がある。資料館は、町長が町おこし的手段として各国から翻訳書を集めた。さまざまな種類の言語の「ドン・キホーテ」が並んでいる。なんとといっても、この小説は聖書について世界で最も多くの言語に翻訳されているという。日本からのものは明治時代の翻訳ものが置いてあった。大勢の訳者がいるが、とてもすべては置ききれないのであろう。

（2005年は「ドン・キホーテ」生誕400年となった　1605年1月16日に「正編」の初版1200部がマドリードで刊行された）

バルセロナ

厳重警戒の日本領事館を訪ねる

年金受給のための在留証明書が必要となり、バルセロナの日本領事館を訪ねた。その際、妻はバルセロナは初めてだったので、土・日を利用し、一緒に市内観光も、ということになった。

南のマラガから北東へ飛行機で約 1 時間

<Ⓧオリンピックのスタジアムのあるモンジュイックの丘から見たバルセロナの遠景>



同じ地中海に面した都市だが、バルセロナは 1992 年のオリンピック開催で、一気に知名度を上げ、一年を通して世界中から訪れる観光客で賑わっている。約 600 万の人口を有するカタルーニャ州の州都。首都マドリードに次ぐスペイン第 2 の都市として商工業も発達、港はフェニキア時代から交易の中継地として栄えてきた。南のアンダルシア州とは異なり、イスラムの影響が少なく、町はヨーロッパ風のたたずまいが強い。

領事館は大きな共同ビルの 3 階のフロアーの一部。まず、受付でパスポートを提示して記録され、磁気の入った入館証を受け取り、それを鉄のゲートに差し込みビル内に入る。3 階の領事館の部屋に入ると、警備員の前で空港にあるような危険物チェックの器械を通る。

館員との応答は、厚い窓ガラス越しで、必要な書類等は数センチだけ凹面ができる窓口を通してやりとりをする。ほぼ完全な防備体制の中である。現今の世界情勢、日本の国際社会における立場、何年か前のペルーの日本大使館襲撃事件を想起してみれば、これはやむを得ない当然の対応なのかもしれない。かつてパナマに駐在していたときに訪れた日本大使館も、ほぼ同じような状態だった。

「自宅（警備員のついた賃貸アパート）から大使館までの往復の通勤時も注意が必要なのです。ですから、自分が運転する車の通路や時間は毎日、変更しているんですよ。」

コロンビアを訪れた際、首都ボゴタの日本大使館に勤務する外交官からこんな発言を聞き驚き、同時にそうした海外の環境で働く関係者のご苦勞を思いやったものだった。ここでの担当者の対応も、館内のいかめしい構造とは違い、親切で心和むものでありがたかった。

ところで、治安といえば、そうした国際的・国家的テロから、小さくは市民や観光客をねらったスリやひったくりまでである。残念ながら、最近のバルセロナはマドリードと同じく、観光客をねらった犯罪が多い。日本で発行されたスペイン観光案内書にも注意が喚起されているのだが、町ですれちがう一部の日本人観光客の身支度はスキだらけ。その行動もこちらから見ると不安な点が多く、“無事故であってくればよいが”と思うことたびた

びだった。

3月、卒業旅行のシーズンだった。どこに行ってもそれとわかるペア、グループまたは一人旅の若者に会った。旅行社が企画したパックの団体観光客も多い。観光メッカの一つ、サグラダ・ファミリアを訪れた際は、たった1時間ほどの間に、2組の20人ほどの日本人団体と5組以上のペアまたはグループに出会った。想像するに、この時期に限っていえば、当地を訪れる観光客の2割から3割は日本人ではないか。日本語の入った観光本や土産品も多い。宿泊のホテルでも、2日間に6組ほどの若いペアに会った。

はるばるスペインを訪ねてきた同胞が、事件に巻き込まれたり、いやな思いに遭って欲しくない。こちらは多少なりとも皆より多い海外経験と現地事情についての知識もある。そんな思いから、よけいなお節介だったかもしれないが、それなりに注意やアドバイスをさせてもらったものだった。

鬼オガウディ、ピカソ、ミロと・・・



観光の詳細はガイドブックに任せるとして、バルセロナはなんといっても「芸術の町」である。サグラダ・ファミリアを初め、カサ・ミラ、カサ・パトリヨ、グエル公園と奇オガウディの作品が町のあちこちに異彩を放っている。ピカソ美術館、ミロ美術館、カタルーニャ美術館、バルセロナ市歴史博物館・・・と、見応えのある美術館や博物館が目白押しだ。

特に、ピカソが少年時代から大人になっていく過程の作品群は、氏の覆い隠しがたい才能と人間臭さがミックスされていて、ひときわ興味と関心を引かれたものだった。バルセロナは何よりも作りそのものが芸術的で、精神的・文化的な肥やしを与えてくれる町である。

今なお工事の続いている
サグラダ・ファミリア

自らを啓発する海外旅行

卒業旅行に限らず、もし時間とお金（親からではなく自分で稼いだ）があるなら、若者の海外旅行は大賛成である。平和にどっぷりつかった日本の社会からすれば、少しの危険や冒険も伴うが、新しい世界の見聞や異なった文化、考えを持つ外国人との交流は、自らを啓発し、視野を広げ、その後の人生を切り開く大きな力にもなっていくだろう。

私自身、こうして多くの海外体験に恵まれてきた陰には、学生時代こそできなかったが、NHK学園高校に勤務していた27歳の夏に、思い切って当時のソ連を旅行したのが一つの大きな要因となっていると思っている。（当時は、今ほど若者の海外旅行が一般的ではなかった。まして共産圏などへは・・・）

セビリア

マドリードから夢の特急AVEで約2時間。セビリア駅は1992年の世界万博を機に(同じ年、北東のバルセロナではオリンピックが開催された)大きく整備されたようだ。天井も高くなかなか壮麗である。

メリメ作「カルメン」や、ボーマルシェの戯曲「セビリアの理髪師」の舞台となったセビリアは、闘牛、フラメンコの本場である。市の端を流れるグアダルキビル川は、コロンプスを初めとする大航海時代の立役者が、さらには約400年前、仙台伊達藩の支倉常長が足跡を印している。

イスラム支配時代の大モスクを基礎として建てられたカテドラルは、ゴシックとルネッサンスの混合様式で、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂、ロンドンのセント・ポール大聖堂と並ぶ世界三大大聖堂の一つとなった。

カテドラルの鐘楼塔・ヒラルダの塔の高さは約98メートル。地上70メートルの高さまで、回り階段とスロープで上ることができる。展望台からのセビリア市内の一望もすばらしい。



ヒラルダの塔

カルメンの舞台を訪ねてみたが・・・

そこから歩いて10分ほどでセビリア大学へ。大学の建物は18世紀に建てられた旧王立タバコ工場。「カルメン」の舞台を偲んでみたい、との思いがあったからだった。

スペインを旅行中の考古学者は今は獄中にいる山賊ホセを知る。ホセは形見の銀メダルを母親に渡してくれと学者に頼んだのち、懺悔話を始めた。それは、純情な青年が情熱の女カルメンに翻弄され、闘牛士や彼女の情夫、果ては彼女まで殺してしまう悲しい物語だった。歌劇とはまた異なる沈痛な激情に貫かれたメリメ(1803~70)の最高傑作。(「カルメン」メリメ作・杉捷夫訳)

人間の本能の奥までえぐるような、ときにドロドロとしたものを流しながら語られる男女の愛。それは、現実を超えたものでありながら、誰の心の奥にも潜んでいる感情、本能を、ホセとカルメンの言葉と行動を通して吐き出させている

日本語訳は文庫本で100ページほどの短編だが、凝縮された内容の濃さに惹きつけられたものだった。

そんな物語のあらすじを思い出しながら、今は大学の法学部となっている建物の事務室の女性に、ホセとカルメンの最初の出会いの場所を尋ねてみた。

ところが。

「エッ！ そんな話は知りませんねえ」との意外な返事。



セビリア大学の正門

「ホラ、『タバコ工場の入り口で……』と、物語には書いてあるんですけど」

「じゃあ、きっとこの大学の正門のところじゃないかしら」

勤務時間外で、事務室にはほかに聞ける人もいない。学生たちもまだ夏休みで構内にあまり見あたらない。日本では人気のある小説も、地元では意外にこんなものかもしれない。いや、作者のプ

ロスベル・メリメがフランス人であることから、関心が薄いのもかもしれない。

あの名著「ドン・キホーテ」も、前・後編を完全に読み通したことのある人は、スペイン人でもそんなにいないという。ひるがえって、「源氏物語」を読み通した日本人もそんなに多くないのと同じことかもしれないが……。

ともかく、正門近くのたたずまいをカメラに収めた。大学を取り囲む塀の壁には、今もセラミックで作られた「タバコ工場」との掲示が5~10メートルおきにあるのも、当時を彷彿とさせてくれる。

人生の哀歓を表現したフラメンコ

夜10時、フラメンコのショーを見に、闘牛場近くにある**タブラオ**（フラメンコが演じられる小劇場）に行った。ジブシーたちの伝統的な舞いとアンダルシアの激しい情念と哀愁が融合して生まれたというフラメンコ。絞り上げる叫びにも似た歌声、熱いギターの音色とともに、踊り子たちの舞台にたたきつけるような靴音が胸をかきたてる。踊り子の手や指の微妙な動きは、人生の哀歓を表現しているという。



この日、場内の観客約100人ほどの、なんと3割ほどは日本人だった。2組の団体観光客と、あとは小さなグループまたは個人のように思えた。市内にはフラメンコ教室に留学している日本人も多いようだ。「本国スペインの次に、あるいはそれ以上にフラメンコが人気のある国は日本」と言われている。そうかも知れない。

フラメンコの踊り

「ハボン」の姓を持つスペイン人

セビリアの近くに、「ハボン（日本）」との姓を持ったスペイン人が600人余りいるという。約400年前、**支倉常長の使節**がここに寄港してしばらく滞在。その後、何人かは居残った。以来、「ハボン」の姓が世代を超えて続いてきているという。マラガ大学で歴史の先生に確認すると、親切にもそのことを報道した新聞のコピーを持ってきてくれた。



「エル・パイス」(有力な全国紙の一つ)の1996年10月27日(日曜日)付け。

「セビリアの日本人?」とのタイトルで、1ページにわたって特集している。タイトルの上部には、支倉常長の銅像をバックに、「ハボン」の姓を持つ少年とそこに集まった市民が写っている。少年の顔は、誰が見てもわかるような日本人の面影を漂わせている。

更に、「ハボン」の姓を持つ著名な3人が顔写真入りで紹介されている。フットボール(サッカー)の審判、元文化参事官、ミス・スペイン。記事は、382年前、支倉の一行が、このコリア・デル・リオに寄港したこと。現在、602人の「ハボン」の姓を持つ市民がいる(人口23600人)。前日には、

マドリード駐在の日本大使も訪れて、記念の行事を祝った。そして、支倉の寄港、宮城県から銅像が贈られたいきさつ、更に「ハボン」との姓を持つ市民のコメントを載せている。

9月の土曜日。セビリア市内からタクシーで20分。グアダルキビル川下流のコリア・デル・リオ市の公園にある銅像の前に立った。銅像は台座と合わせて高さ5メートルほど。2本の刀を腰に、支倉常長はグアダルキビル川に向かってきりりと顔を引き締めている。台座にはスペイン語と日本語で、そのいきさつが彫り刻まれている。

<日本語の文言>

この銅像は、当地に上陸した仙台藩士支倉常長一行の偉業をたたえるとともに、1991年に実施した「第2回みやぎ創造の翼」の青年団員と貴市市民との交流の記念として、親愛なるコリア・デル・リオ市民に日本国宮城県が贈呈するものです。

使節一行は、1613年10月28日仙台藩主伊達政宗の命を受け、仙台領月の浦(宮城県石巻市)を出航、イスパニア国王に交易を求める政宗の書状を携え、1614年10月12日当地に上陸したものです。

1992年6月

寄贈	宮城県知事	本間俊太郎
制作		佐藤忠良

スペイン語の文言は、基本的に内容は同じだが、これより詳しく長くなっている。その部分を付け加えると、当時の状況がよりわかる。



<日本語にない部分の概訳>

使節はメキシコに寄り、スペインの沿海を通り当地に寄港、この村の人々の熱い歓

迎を受けた。10月23日、セビリア市に到着。スペイン国王に書状を献呈後、フランスを通過しローマに向かった。そこで1615年11月3日、パウロ5世に謁見。その後、セビリアに戻り滞在、1617年7月4日、日本への帰国の途についた。

日本語とスペイン語の文言の間には、一行の往復の航路を示す世界地図および日本近海と地中海の拡大図が描かれている。

「エル・パイス」記事によれば、支倉の帰国に際し、10人以上が乗船せず、そのまま残った。そこから「ハボン」との姓が誕生したものだという。

現在「ハボン」の姓を持つ市民の感想では、「その血筋、いわれを誇りに思う人」「何となく親密感を抱く人」「支倉等の歴史について全く知らなかった人」「どちらでもいいと余り関心を抱かない人」等、さまざまであり、世代が移り、その表情・体型が日本人の面影を残している人は少なくなっている。

ところで、日本とイベリア半島との交流は16世紀から始まっている。室町時代の1543年、3人のポルトガル人が種子島に漂着し鉄砲を伝来。1549年には、スペイン人のフランシスコ・ザビエルがキリスト教の布教のために来日している。

土曜日の昼下がりに。グアダルキビル川から吹き寄せてくる風が心地よい。公園のベンチに憩う年配の男性。街の角でいつまでも議論を続けている男たちの“井戸端会議”。なぜか女たちの姿が見あたらない。私も意識して、日本人の相貌に似た人を探してみたが、残念ながら遭遇するチャンスには恵まれなかった。

コーヒーを頼んだカフェテリアの太った年配の男性が手を広げて言った。

「女たちは家で昼飯の支度をしているヨ。そう、オレたちにとっても、日本の勇敢なサムライの子孫がいるというのは誇りでもあるよネ。ここにも観光で日本人がいっぱいやってくるし……」

グラナダ

イスラム芸術の粋「アルハンブラ宮殿」

アルハンブラ宮殿 スペイン語では、「Alhambra」の「h」を発音しないので、「アランプラ」と呼ばれる。イスラムのスペイン支配最後の牙城。歴代の王の居城として華麗な王宮には、イスラム芸術の粋が残っている。

1492年（コロンブスの新大陸到着の年でもある）、宮殿の無血開城により、カトリックの軍によるレコンキスタ（国土回復運動）は終わりを告げた。

「アランプラ」とは、アラビア語で「赤いもの」を意味する。城壁に使われた石が多量の赤鉄を含んでいたため、城壁が赤く見えたことに由来している。1日の入場者約7000人。

年間で 200 万人。スペインでもっとも訪問者の多い史跡である。

敷地は大きく分けて、要塞部分のアルカサバ、王の居城としての王宮、夏の離宮ヘネラリフェ庭園の三つに分かれている。



ここでは、2 世紀半の長い治世の中で、血で血を洗う権力争いも繰り広げられた。新王の即位に合わせ、先代が建てた建造物を破壊し、新たに自分の権威を誇示するように王宮を建てなおすこともあった。そのため、宮殿は、長い年月をかけて様相を変化させ、拡大されてきた。



歴史の盛衰とその陰にある権力抗争。アルハンブラ



はイスラム最後の遺跡である。これを日本人受けする“滅びの美学”と評した作家もいたようだが、

アルハンブラ宮殿の遠景④、水への憧憬を感じさせる中庭⑤、イスラム模様の壁⑥

なるほど、そんな気分がしないでもない。宮殿の敷地内には国営ホテル・パラドールがある。建物は 15 世紀の修道院を改築したものだが、ここに泊まり、夜、天空の月を眺めれば、まさに「荒城の月」の実感がしてくるかもしれない。

ワールドカップ(2002 年)の感想あれこれ

アルハンブラ宮殿の見学を終え、観光バスに乗った我々一行は、近くのレストランで昼食会となった。それぞれグループごとに丸テーブルに座った。我がテーブルの仲間は、ベルギー、アイルランドからきた夫妻と、スペインは北部のバスク地方からきた母娘、それに妻と自分の 8 人だった。

英語グループ 4 人とスペイン語グループ 4 人だったが、バスクからの娘も高校 3 年で英語を勉強中ということで、英語でアルハンブラについての印象交換ほか、雑談に花が咲いた。

ベルギーからの 40 歳前後の男性は、2 週間の会社の休みを取ってスペインを旅行中という。アイルランドの 50 歳前後の男性は、英語と歴史専攻の中学校教師。3 ヶ月間の夏休みを利用して自ら研修旅行。バスクからの母娘は、やはり学校の夏休みに、歴史の勉強をかねて南まで来たのだという。

「みんな、休みが長く取れていいですねえ。日本では、まとめて休暇を取れるのはせいぜい 1 週間。学校の教師の夏休みににしても、『自宅研修』という名目がつき、相当に動きが制

約されるんですよ」と私。

「そう、ブリュッセルにも大勢の日本人観光客がやってきている。でもみんな忙しいみたい。明日はパリ、3日後はローマとヨーロッパを駆け回っているみたいだね」とベルギーからの男性。

「それは、なかなか休みが取れないなか、お金のことも考えて、短期間にできるだけ効率的に各地を回ろうとする一面を反映した、やむを得ない動きなんですよ」と私。

「そうそう、効率的というと、今回の日本のワールドカップ(2002年)の運営は素晴らしかったね。あそこにその『効率的』ってヤツが出ているのかもしれないね。スタジアムの素晴らしさといい、テレビ中継の技術といい、非の打ち所がない。日本は本当によくやった」「日本チームも予想以上の大健闘。日本のフットボール(サッカー)も、格段にうまくなってきたよな」

「韓国との2カ国共催というのも成功したね。今後にいい例を残してくれた」

「ウン、いつかアイルランドとスコットランドで共催する、なんてことを考えても面白いよな」

「ええ、スペインも前評判は高かった。審判の難しい判定もあって敗退してしまったけれど、よくやったと思うワ」

ベルギーは日本と初戦で対戦。アイルランドも強国としての印象を残している。スペインは地元韓国との対戦で惜敗している。ワールドカップの余韻がまだ残っている中で、たまたま出場4カ国の“外野応援団”がアルハンブラの地で、スタジアムならぬ直径2メートルほどの丸テーブルに会したのも面白い。世界は狭い。

ジブラルタル

海上交通と軍事面での要衝

アフリカ大陸に最も近いスペイン領土、いやイギリス領土“GIBRALTAR”。スペイン語では“GI”を「ヒ」と発音するのでスペインでは「ヒブラルタル」と呼ばれている。地中海と大西洋



ジブラルタルを象徴する岩山

を結ぶジブラルタル海峡。そして海峡はヨーロッパ大陸とアフリカ大陸を結んでいる。世界の海上交通上からも、軍事的な視点からもきわめて重要な地である。

ジブラルタルの国境に着くと、まず出国、入国審査から始まる。正式に言えば、スペイン領土からイギリス領土への入国である。といっても、審査のための大きな事務所があるわけではなく、審査官がバスの中まで乗り込んでくる。最初にスペイン側の女性審査官が、続いてイギリス側の男性審査官。ほとんどの乗客がパスポートを見せるだけの略式審査で終わる。

観光の場合、イギリス領土内のターミナルに到着したバスから、ここに備え付けのマイ

クロバスに乗り込む。ガイドを兼ねた運転手は、左手にハンドル、右手にマイクを握りしめて通過地の案内をしていく。英語、ドイツ語、スペイン語で。更にフランス語でもテープを流した。この地で旅行業務に携わる人は、最低 3 カ国語に通じなければいけないようだ。

ジブラルタルは高さ 425 メートルの岩山を中心に、幅 800 メートル、長さ 1600 メートルの半島からなっている。バスは途中、鍾乳洞の入り口で止まった。サンミゲール洞窟。中に入ると予想外に深く大きい。ガイドブックはなかなか面白いエピソードを紹介している。

洞窟の中でコンサートを

「この洞窟には底がない。地下のトンネルでアフリカ大陸とつながっているととも言われる。でもそれはあまり信用できないけれど……」

「1840 年、2 人の兵士が洞窟に入って行ったが帰ってこなかった。総力をあげて捜索したが、2 人の兵の遺骸も跡形も見つからなかった。ここから、人々は洞窟には底がないと信ずるようになった」

「第二次世界大戦の間、洞窟は救急病院として使用されるように準備されたが、使われるまでには至らなかった」

「今日、洞窟はその素晴らしい音響効果から、オーケストラの演奏会やコンサートに時々使われている」

.....

洞窟の自分がある足下から 20 メートルほど上方には、数え切れない数の氷柱に似た鍾乳石が垂れ下がり、下からは数メートルほどの石筍（せきじゅん）が上に伸びている。それが人工の照明に照らされて、きわめて幻想的な光景を生み出している。なるほど、洞窟のほぼ真ん中には、コンサート用の舞台と 100 人余りを収容する観客席ができていた。

下界から一切遮断された、しかも周囲に大変な凹凸と深みがある会場のコンサートとはどんなものになるのか、一度、是非鑑賞してみたいものだ。ここから約 100 キロ余り東には、世界最大規模のネルハの洞窟もある。地中海岸一帯が、洞窟がしやすい地層になっているのかもしれない。

人口約 3 万のジブラルタルの町。正式な通貨はイギリスのポンド（イギリスは 2005 年現



ジブラルタル海峡からアフリカ大陸を望む

在、まだユーロ体制に入っていない）だが、ユーロも使える。物価は一部の免税品をのぞき、スペイン本土よりも高いようだ。

フェニキア人の時代から、ローマ帝国、サラセン帝国、スペイン帝国、そして大英帝国へ。ジブラルタル海峡は歴史の海流と興亡を映してきた。そして、

現在もスペインとイギリスの間で、領土の返還交渉が続いている。面積はたった6平方キロだが、“要衝の地”なるが故に、いつまでも政治、軍事面で重みを持っていくのであろう。

郷に入ったら郷に従え

スペインに住んだ日本人にとって、不便というか気にかかるのは、時間のルーズさと、商店、スーパー、デパートなどでのサービス精神の欠如であろう。私自身も、買い物をし、日本のように「お客様」として大切に扱われたような経験は、残念ながらあまりない。この点は、スペイン自身も認め、これから改善していかなばいけない、と思っている人も多いようだ。

「郷に入ったら郷に従え」 地元の文化、習慣を尊重しながら、良い面を学び合っていくことが必要だろう。海外に出たとき、訪れた国が日本ほど物資が豊かでなかったり、近代化が遅れていることを見て、その国を下に見ようとする日本人も中にはいる。でも、二つの国の生活水準だけ取り上げて比較することは意味がないだろう。どっちが上で、どっちが下だとか、どっちが進んでいて、どっちが遅れている、とかいった単純なとらえ方……。

マラガ大学の教師ラファエルが語ったことがあった。

「少し前のことだけど、勉強熱心な日本人の男子学生が自分のクラスにいた。あるとき、仕事への取り組み方が話題になった。彼はクラスで得意そうに言ったんだ。『日本のサラリーマンにとって、会社は最も大事な存在。だから、みんな働き者で、会社の業績を上げるために、ウイークデーには残業し、土・日に家にいても、翌週の仕事を考えているんだ』って。そこでボクは言ったんだ。『スペインでは、ウイークデーの仕事でも、今度の週末は何をして楽しむか、そのことばかりを考えているんだよ』って」

世界には多様な価値観、人生観があることを知らねばいけない。

科学の進歩が即、人間の幸せをもたらす、という短絡的な思想。文明から離れた島で幸せに暮らす人々（例えば、第1部にあるクナ族）と、モノは豊かでも、大都会の危険やストレスの中での忙しい人々の生活。平安時代と現代の人間とどちらが幸せか。あるいはもっと簡単に、今の子供の時代と自分が子供だったときの時代と、どちらが良いかなんて、簡単には決めつけられないだろう。

“進歩信仰”に毒され、外国からは、日本の古い伝統や文化が高く評価されているのに、日本人自身がそれを忘れ、どんどん失っている面もある。

モノとお金为中心で、文化や人間の心のないつながりは、顔のない国を作り出してしまおう。“メイド・イン・ジャパン”は知っていても、日本または日本人については知識も意識も薄い外国人も多い。幸いにも、近年のサッカーのワールドカップやオリンピックで状況はかなり好転しているような気もするが……。

小さな小さな“民間外交”

<写真店での会話から>

そんなことから、私は大学の教室のみならず、街角の写真店で、魚屋で、テニスの練習で、できるだけ日本の本当の姿を伝えようと交流を心がけてきた。

アパートから歩いて 5 分ほどの街角の写真店の店主は、私のスペイン語をホメながら間違いを直してくれる。白くはげ上がった頭に満面の笑顔。若い美人の助手も愛想よく会話に加わる。カウンター後方の棚には、コダックフィルムと一緒に富士フィルムがずらりと並んでいる。

店主は注文の 1 個を取ると、私に手渡ししながら言った。

「やっぱり、日本のフビフィルムは、一番いいよ」

「フジ」でなく「フビ」である。そこで私も愛想よく言ってあげた。

「そう、スペイン語では『JI』は『ヒ』と発音されるけど、これはモンテ・フジ（富士山）の『フジ』。固有名詞だから、やはり『フジ』の方がよいと思いますよ」

たわいないやりとり。でも、お互いにこれで親しみがいっそう増す。小さな小さな“民間外交”である。

セビリア駅のトイレの改善を提案した手紙に、同駅駅長から丁寧な感謝の手紙が届いたこともある。

<スペインの消防署に大阪の消防署のエンブレムを>

トレモリーノスのアパートのすぐ近くに、大阪で消防署に勤務し、2 年前に定年退職したという M さん夫妻が滞在していた。

町の遠くないところに消防署があった。訪れた先で消防車や消防署に遭遇すると、かつての血が騒いでくるらしい。「いつか一緒にここの消防署を訪ねたいので、通訳をお願いしたい」と M 氏から頼まれていた。

たまたまクラスがなかった日、氏と消防署を訪ねた。探求心の旺盛な M 氏を迎えた同消防署の署長は、すこぶる愛想よく対応、現場を案内、懇切丁寧に説明してくれた。M 氏は大阪、また日本の消防署の状況を伝え、機材にさわりながら質問していった。

石材やコンクリートを主体としたスペインの家屋と、木材を主体とした日本の家屋への防火方法の違いから、救急の方法まで話が及んだ。

終わり際、署長は「記念に」と、トレモリーノスの消防署の活動を紹介した本、それにエンブレムとキーホルダー、ネクタイピンを我々に渡すと言った。

「これから 1 年以内には、新しい消防庁舎が完成する。そこには、世界の消防士のエンブレムをガラス枠に入れて展示することになっている。でも、残念ながら日本のものがないんだ」

すると M 氏は声を弾ませながら言った。

「私はまもなく日本に帰る。大阪のエンブレムでよかったら、資料と一緒に送ります」

よ」

M氏が帰国してまもなく、約束したエンブレムや大阪市消防局の活動紹介のパンフレットが私のもとに届いた。私はそれにスペイン語訳をつけると、さっそく署長のところへ持っていった。署長は相好を崩して言った。

「さすがに日本人は早いねえ。言ったことはキチンと実行するし……。エンブレムもちょうどタイミングがよく届いてよかった。今、展示枠に各国のものを貼っているんだ」

そう言うと、部下にその一つを持ってこさせた。エンブレムはヨーロッパやアメリカのものが多かった。見た限りでは、アジアのものは一つもなかった。ということは、大阪のものが“アジア代表”になるわけだ。新庁舎のオープニングが楽しみではあった。



<日本の押し花に“ケポニータ！（なんてきれいな！）”>

海外に長期間滞在するという「ロングステイ」が日本でも静かなブームになりつつある。コスタ・デル・ソルには私たち夫婦のほか、数十人の日本人が生活していた。定年後、こちらで年金生活をしている人、また現役で仕事をしている人等、各人が目標を持って生活している。こうした日本人の間の情報交換と親睦を深めるために、数年前に「コスタ・アミーゴス」という会が発足した。

それぞれがボランティアで教え合い、スペイン語の勉強や絵画、俳句の会なども開催されていてなかなか活発である。私も、季刊誌に小文を寄せ、定例会では、現役時代の体験を生かした話をさせてもらったこともある。

妻も日本では押し花の学校に通っていたことがあるので「皆さんにも教えて差し上げたら」と勧めたこともある。でも、こちらでは材料（乾燥剤）が揃わないということで、なかなか実現にいたっていない。

それでも、手元の限られた材料で作った十数個の押し花は、スペイン人の病気見舞いに、知人の引っ越し祝いに、また母国に帰るマラガ大学の学生にプレゼントすると、「ケポニータ！（なんてきれいな！）」と大変な好評を博したものだ。これもミニミニ“民間外交”と言えるかもしれない。

妻の実感のこもった言葉である。

「海外に出るときは、その国の人に伝えていける、日本的で何か自分の得意なものがあると、きっとステキでしょうね。みんなにも喜んでいただけるし……」

語学習得のために

私の語学取り組み体験

本レポートも最終章に入ってきた。そこで、これから留学されようとしている方、また、これから語学に本格的に取り組もうとしている皆さんに、少しでも参考になり、お役に立つことができるならばと、いまだ未熟な自分の語学力を承知の上で、私の語学習得に関する体験をご紹介します。

大学時代(早稲田大学商学部)の第二外国語はドイツ語だった。スペイン語については、大学を卒業してNHK学園高校の教諭(商業科)を務め、その後、聖教新聞社に入社してしばらくたった頃、必要性を感じて独力で勉強を始めた。中南米関係の記事が増え始めていたのに、スペイン語のわかる人が社に誰もいなかったからである。

一時は、スペイン語ができる人を探しては翻訳をしてもらったりしていたが、相手も都合のあることだし、時間も費用もかかる。“何とか、ある程度のものは自分でできるようになりたい”との思いから、決心し始めたことだった。

34歳で初めてスペイン語に取り組む

当時34歳。大学卒業後すでに10年近く経過、記憶力も下り坂になっているときである。まったくゼロからのスタート。特にスペイン語は動詞の活用変化が難しい。そこで、週2回、2時間、スペイン語教室に通って文法を勉強、あとはNHKのラジオ・テレビ講座、参考書による独習をしていた。

ところが、10ヵ月ほどたった頃、急きょ、パナマに特派員が必要との状況が生じてきて、たまたまスペイン語をやっていたことから(むろん、ほかの要素からも検討されたと思うが)私が派遣されることになったのである。

パナマに着いてから約2年間、仕事の合間を縫って現地のスペイン語教室に通った。クラスの仲間は、アメリカ、カナダ、フランス、インド、中国とそれぞれパナマに駐在しているビジネスマンやその夫人たちだった。教材のテキストはすべて英語で解説されていた。担当教師の説明も当初は英語、やがてスペイン語のみになった。当たり前のことだが、ここでは日本語はまったく通用しなかった。だが、結果的にはそれがよかった。思えば、まがりなりにも英語ができたのは、大きな救いだったといえる。

その後、現地の機関紙の編集の応援をする必要から、支局のすぐ近くにあったパナマ大学の新聞学科に聴講生として、週1回2時間、2年間学んだ。これは、編集のほかにも社会事情やさまざまな表現の仕方を知る上で役に立った。

語学は「やる気」と「根気」以外にない

さて、英語については高校時代から勉強してきたほうだと思う。一般に、英語の読解力については日本人はレベルが高い。問題は会話力である。

現在、ラジオ、テレビの語学放送、テープ、語学学校、各種参考書と、巷には語学教材

が氾濫。更には「××週間で話せる英会話」といったハウ・ツーものも町にあふれている。だが、私個人の体験から言えることは、そんなに安易にことが運ぶことは決してありえない。語学は「やる気」と「根気」以外の何物でもない、ということである。ちなみに、NHKの語学番組のテキストの販売部数は、毎年4月を頂点にして、急下降のカーブを描いているという。

学問的なアドバイスはその道の専門家をお願いするとして、私は聴解力のアップのために、電車・バスの中を初め、歩行中も英語のカセットテープを手放すことはなかった。誰も通らない路上では、耳から入った文を大きな声を出して復唱した。長時間イヤホーンをしていたため、時には耳が痛くなった。



同じことの繰り返しに飽きて、吐き気をもよおすようなことさえあった。でもともかくやりぬいた。一方、英語のテレビ番組、映画等、時間の許す限りそれらに触れた。そしてつかんだ結論は、「語学に王道はない。ただ、“やる気”と“根気”のみ」ということだった。一生のうちのある期間、“これほどまでに勉強したことはない”と思えるほどの努力が必要だと思う。

英語圏の国に住んでいるからといって、決して自然に英語が上達するわけではない。本人に意欲と実践がない限り向上はありえない。逆に、日本の田舎にいても、本人に“やる気”さえあれば、語学上達の道はいくらでもあると思う。

外国語の大切さについては、いまさらここで触れることもないと思うが、インターネットを初め、世界がますます一つになりつつある中で、その重要性は飛躍的に高まっていくのはまちがいない。国として国際舞台で発言力を高めていくためにも、企業として海外に進出していくためにも、外国語に堪能な人材の育成は不可欠となってきている。

ちなみに 太平洋戦争の開戦後まもなく、米海軍は全米の大学から知能指数の高い青年を集めて日本語の特訓をした。猛烈な集中講義のおかげで、彼らのごく短期間で日本語の新聞を読み、草書も映画も理解できるようになった。2000人の卒業生の中には、ドナルド・キーンなど多くの知日派や、日本との友好交流に深いつながりを持つようになった人がいた。戦時中、「敵性語」として英語を排斥した日本がアメリカに勝てるわけはなかった。

50歳を過ぎて再び英語に挑戦

パナマから帰国して本社の外信部にいたとき、外国人へのインタビュー等の仕事で外国語を使うほか、住んでいた昭島市では、米軍横田基地の仏教徒メンバーの応援をしていく立場になった。昭島市が基地のある福生市とすぐ隣であることと、なんとか英語ができるから、との事情からだった。

とはいえ、アメリカ人メンバーからの相談に乗り、満足のいく激励やアドバイスができるためには、それまで以上の語学力が必要なことが痛感された。「自分の英語力がアップした分だけ、皆に役立ち貢献していくことができる」が実感だった。そこで再び、今度は英

語の勉強を始めた。刺激になるからと TOEIC や英検も受験した。50 歳を超え、髪もかなり薄くなった自分のような受験者は、なかなか見当たらなかった。でも、若者との切磋琢磨は快い刺激となったものだった。

2001 年 3 月、定年となり時間が自由になると、私は基地の中にある「セントラル・テキサス・カレッジ」に入った。週 2 回、1 日 3 時間ほどの授業だったが、せっかく縁のあるところで、英語と共にアメリカ文化についても理解を深めることが、メンバーの考え方をより深く理解するのにとも有用だと思ったからだった。

ここに入るのに、今度は TOEFL の成績が要求された。そこで再び、その試験に挑んだ。この結果、これまでに受けた 3 種類の試験の到達点は、TOEIC 835 点、TOEFL 207 点(コンピュータによるテスト)、英検準 1 級となった。これから 1 級に挑戦しようと思っている。目標のあるところに挑戦の意欲がわき、若者から受ける刺激は、自分への大いなる励ましともなっている。

定年後からスペイン語の完成を目指す

定年になってなぜ今更スペイン語を？ 時間的に自由になった今、これまでの体験、積み重ねを最も効果的に生かし、自分の更なる成長を図りながら、所期の目的に貢献したい、との思いからである。また、「ドン・キホーテ」について本格的に取り組んでいくのに、スペイン語をもっと深めておく必要もあった。



スペイン地中海岸の夜明け

もちろん、原書は、現代スペイン語とは異なり難しいが、ドン・キホーテが訪れた舞台を訪ね、地元の人々と交流、いろいろな話を聞き出すのに、言葉と共にスペインの文化事情や歴史を勉強しておくことも求められるからだった。それに、横田基地のアメリカ人メンバーに対してそうだったように、スペインの仏教徒メンバーに少しでも役立っていけるためにも、言葉の研鑽は欠かせない。

約 1 年間に及んだ留学の最後の月には、出版予定の自著()の大学生活の部分を、自分でスペイン語に翻訳、担任教師のラファエルにチェックをしてもらった。大学の関係者に記述内容の確認をしてもらうことと、スペイン語がこのレベルまでいたったことをお世話になった先生方に報告するためだった。

文中に名前が登場する先生に了解を求めると、ほとんどが「荣誉なことです」とのありがたい返事だった。

ラファエルは、内容のみならず、文法や表現の誤りまですべてチェックしてくれたのである。赤い字の入ったスペイン語原稿は、私にとっては、かけがえのない宝となった。これでは、謝礼を差し上げなければ申し訳ないと思った。

ところが 。

「こちらこそ御礼を言いたいところだ。キミの原稿を読みながら、ずいぶん勉強をさせてもらった。東洋と西洋の文化比較、日本人とスペイン人の考え方の違い等々。この大学にもいっぱい日本人学生が来るから、彼らにあった授業を進めていくためにも、いろいろと役に立つよ。それに定年後の生き方も、スペイン人に共通してくる問題だし・・・」

氏はときどき、スペイン語で俳句を詠むなど、日本の文化や仏教にも深い関心を寄せている。私もこの機会に日西の文化交流や相互理解の深まりに、微力なりとも役に立つことができれば、と心に誓ったものだった。

語学の翼で世界に夢を

かつて、青年の育成に心血を注ぐ世界的な教育者から、語学の習得に関して、次のような励ましの言葉を聞いたことがあった。

「使命を自覚したとき、才能の芽は急速に伸びることができる」。これは、未来を担う中・高校生に贈られたものだが、語学に限らず、また中高年の人にも当てはまると思っている。夢が、志が人を創る。大きな夢と大きな志は大きな人生を創る。自分を高めていくのも、自分を貧しくさせていくのもこの心次第だと思う。

世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことがいっぱいある。そんな異質な文化や生き方に感動し、啓発され、自らの世界が広がるのが海外生活の一面ともいえるだろう。日本や日本人の生き方を、外側から見つめ直し、国際理解を深めていくこともできる。

そして外国語の習得は、その世界につながるパスポートとなっている。さあ、語学の翼であなたも世界に夢を広げていこう。

「『定年留学』してみませんか? 60歳からのアクティブ・ライフのすゝめ」(文芸社)

電子本アドレス：<http://www.boon-gate.com/02/>